

富山県上市町

丸山B遺跡発掘調査概報

1996年3月

上市町教育委員会

序

上市町丸山B遺跡は、平成4年度に第1次調査（試掘調査）、平成5年度に第2次調査（県道拡幅に伴う本調査）を行い、その成果を「上市町丸山B・眼目新丸山遺跡発掘調査概報」として、刊行してきたところです。平成7年度には、県道の拡幅工事の延長が、ふたたび遺跡範囲にかかることになり、事前の発掘調査を行いました。

調査の結果、縄文時代中期の良好な住居跡から、石棒などの貴重な資料を発掘することができ、当時の精神生活の一端をかいま見ることができました。また、第2次調査で発見された古墳時代の遺物が今回も少量ではありますが、発見され、この付近に古墳時代の営みが確実にあったことも示してくれました。

調査は、平成7年10月から12月に実施しましたが、この間に掘り出された資料が上市町及び富山県の歴史を物語るものとして活用されれば幸いです。

最後になりましたが調査にあたり多大な御協力をいただきました富山県土木部立山土木事務所、県立上市高等学校、富山県埋蔵文化財センター、地元丸山・極楽寺両地区のみなさまに心より感謝申し上げます。

平成8年3月

上市町教育委員会

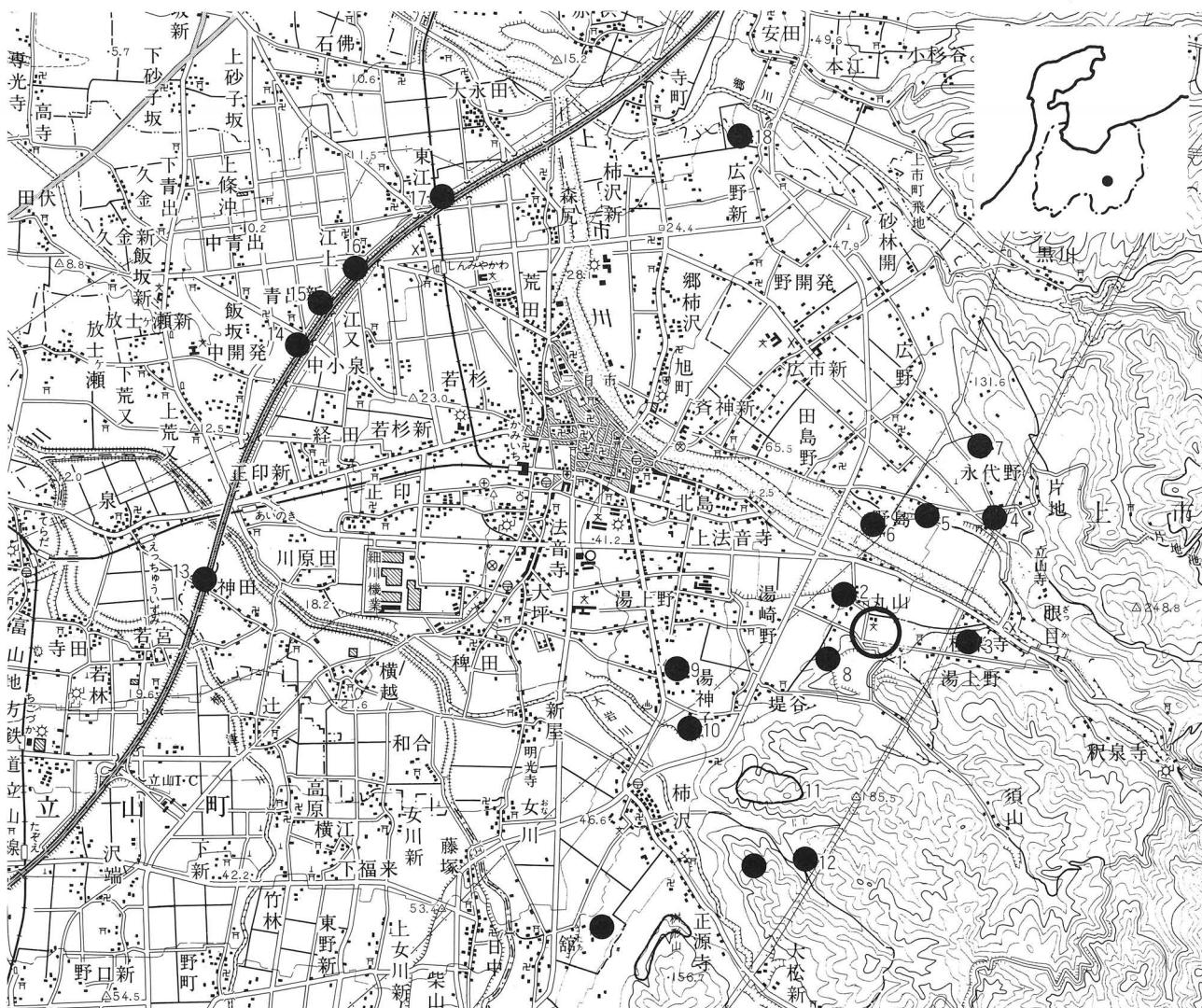
I 遺跡の環境

丸山B遺跡は、富山県中新川郡上市町湯崎野に所在する（第1図・第2図）。遺跡の北側には、まちの中心部を流れる上市川が西流し、北側は、標高150～180mの山地がせまる。遺跡は、上市川が形成した河岸段丘の左岸、標高約90～95mに占地し、北側が比高差約6mの段丘崖に面する。

今回の調査箇所は、標高約94～95mの県道沿いで、東から西に向ってなだらかに傾斜する地域である。

遺跡は、昭和28年頃、町在住の森秀雄氏によって発見された。遺跡は、縄文時代の丸山B遺跡・旧石器時代の眼目新丸山兩遺跡が同一地内に所在するが、今回の調査区域では、縄文時代の遺構のみが検出され、旧石器時代の土層では遺物が検出されず遺跡の広がりは確認できなかった。

周辺には、縄文時代の遺跡として、丸山A遺跡（前期～中期）が隣接し、東側約700mには縄文時代前期の標識遺跡、極楽寺遺跡が占地する。また上市川をへだてて対岸には、野島遺跡（後期～晚期）・永代遺跡（中期）・野島大門遺跡（中期）など上市川左右両岸の河岸段丘には数多くの遺跡が存在する。この時期以降の遺跡では、堤谷古窯跡（奈良）・柿沢古墳群（古墳）・湯神子A・B・D（縄文中期・弥生・古代・中世）などの遺跡が、北側に点在する。以上のように上市川左右両岸の河岸段丘とその背後の台地上は、旧石器時代から今日に至るまで人々の活動の基盤として利用されており、当町の歴史的バックボーンとなる地域である。



第1図 地形と周辺の遺跡 (1/50,000)

1. 丸山B遺跡・眼下新丸山遺跡, 2. 丸山A遺跡, 3. 極楽寺遺跡, 4. 野島大門遺跡, 5. 永代遺跡, 6. 野島遺跡,
7. 永代野遺跡, 8. 堤谷古窯跡, 9. 湯神子B遺跡, 10. 湯神子A遺跡・D遺跡, 11. 柿沢古墳群, 12. 亀谷古窯群,
13. 神田遺跡, 14. 中小泉遺跡, 15. 飯坂遺跡, 16. 江上A遺跡, 17. 東江上遺跡, 18. 本江広野新遺跡

Ⅱ 調査に至る経過

上市町丸山・湯崎野地内では、平成4年度から、一般地方道極楽寺湯神子線の拡幅工事が計画され、平成5年度にはこの拡幅工事が実施され、それに伴う事前の発掘調査が丸山B・眼目新丸山遺跡で実施された。その後一時、工事は中断していたが、平成7年度にその延長部分の施工が計画された。しかしながら、前回調査で遺跡の広がりが7年度調査区にも延びていたため、富山県土木部立山土木事務所・上市町教育委員会・富山県教育委員会の三者により、遺跡の保護と工事計画との調整を計るための事前協議が催された。

協議では、道路拡幅部分の本調査を実施し、他の部分については現状保存することで三者が合意した。

Ⅲ 調査の経過と層位

第1次調査（平成4年度試掘調査）

平成4年12月1から同年12月20日までの延べ12日間で実施した。調査対象は5,000m²でテニスコート建設に伴う試掘調査約300m²を実施し、遺跡の内容を確認した。その結果、住居跡、溝、穴などの遺構、縄文土器・石器などの遺物が確認され、良好な残存状況を示した。この結果テニスコートが遺跡に影響を与える部分について、計画変更して施工することとなった。なお、調査は、上市町教育委員会が試掘として対処し、県補助金を受けて実施した。

第2次調査（平成5年度本調査）

平成5年5月20日から同年8月12日までの延べ61日間で実施した。対象は県道拡幅部分500m²で遺跡の記録保存調査を実施した。その結果、縄文時代中期の住居跡3棟、土壙・穴約200箇所、溝2本と、奈良平安時代のものと考えられる土壙も確認された。遺物は、縄文時代の深鉢、石器のほか古墳時代の土師器も多数出土した。また、この縄文時代の地層の下約70cmで先土器時代の石器群（73点）が発見され、良好な包含層が確認された。なお、調査は、立山土木事務所の委託を受けて上市町教育委員会が実施した。

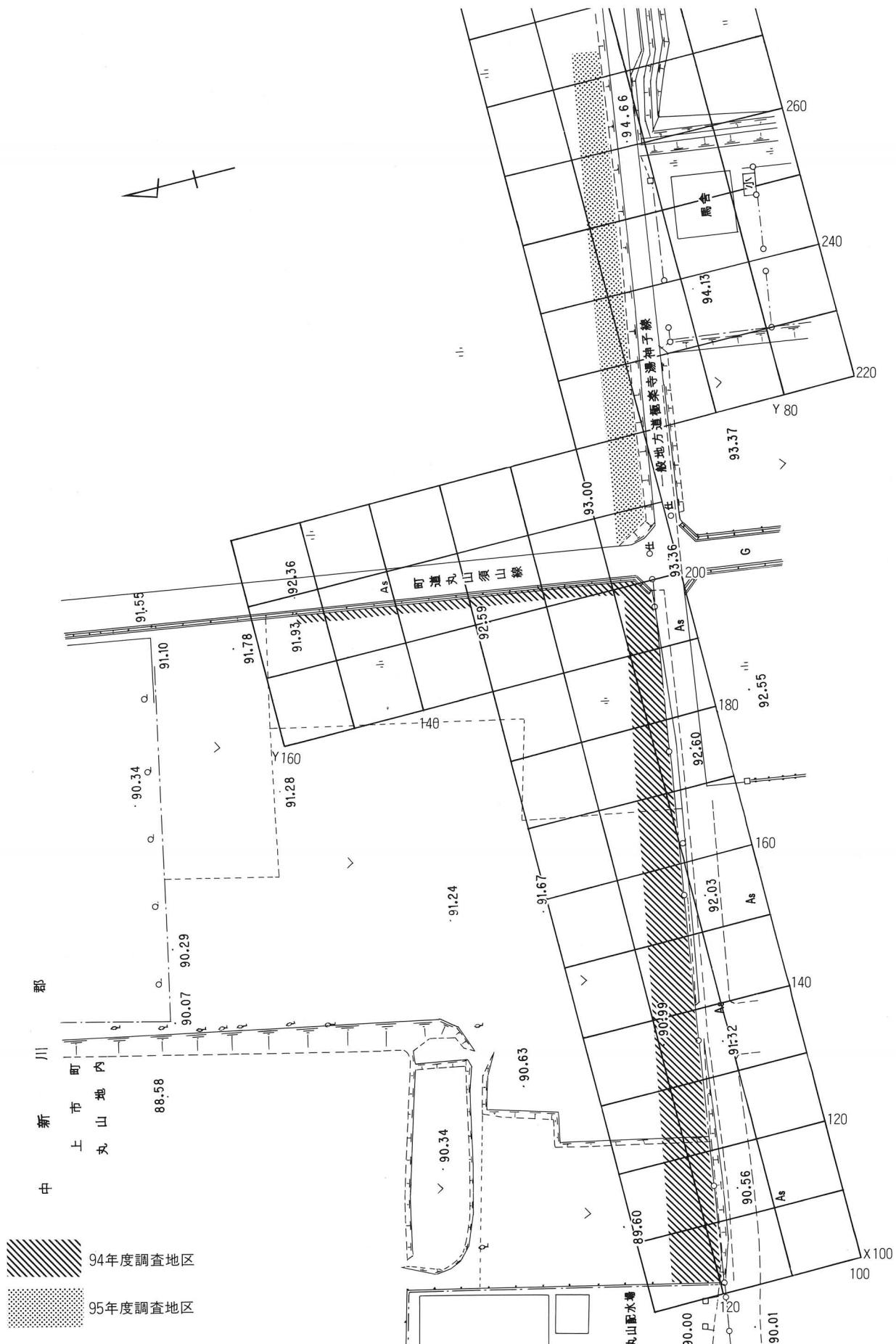
第3次調査（平成7年度本調査）

平成7年10月25日から同年12月15日までの延べ38日間で実施した。対象は県道拡幅部分375m²で遺跡の記録保存調査を実施した。その結果、縄文時代中期の住居跡3棟、土壙・穴約100箇所、溝2本と古墳時代の溝1本を確認した。遺物は、縄文時代の深鉢、石器のほか古墳時代の土師器・須恵器も数点出土した。このうち縄文時代の住居跡からは、石棒が出土した。建立位置も復元できる事から注目される。なお、調査では旧石器時代層の発掘も行ったが遺構・遺物は確認されなかった。調査は、立山土木事務所の委託を受けて上市町教育委員会が実施した。

層位

層序は、第1層耕作土層（10～30cm）・第2層黒褐色土層（約20cm）・第3層黒灰色土層（5～10cm）・第4層黄灰色土層（10～20cm）・第5層黄色土層（10～20cm）で堆積しており、調査区東側で耕作による攪乱が全体的に見られる。

遺構面は縄文時代が第4層上面で、第3層がその包含層である。第1層・第2層は、牧草地の耕作の際、攪乱を受けており、遺物は、ほとんど見出せない。第4層では、前回調査で見られた人為的な平坦面は、観察されなかった。出土遺物から見ても、前回調査と時期の異なる遺跡である物と考える。第5層以下では、前回調査で見られた、付近の山の崩壊土の流入跡も確認されなかった。



IV 調査結果

1. 遺構（第3～6図、図版10～13）

調査は、道路拡幅部分5m延長75mで実施した。検出した遺構は、縄文時代と古墳時代に属するものである。遺構は、調査区全体で検出されるが、前回調査で検出された旧石器時代層では遺構、遺物は確認されなかった。

検出した遺構は、縄文中期の住居跡3棟と、穴100箇所あまり、及び古墳時代の溝1条、である。

1号住居跡（第3・4図、図版11の3）住居跡はX100Y234地区付近で、調査区の中央部に位置する。全体の3分の1を検出したにとどまるが、一辺が約5mの隅丸方形プランの住居跡と考えられる。住居は、基盤となる面を約3cm程度掘り込んで床面としており上面がかなり削平を受けている。住居内の柱穴は5カ所確認できる、深さ20cm～30cm掘り込まれているが、どの様な柱かは判然としない。炉跡は検出していないが、南側で縄文中期の土器片と、擂石が出土している。この土器から住居跡は縄文中期のものと考えられる。

2号住居跡（第3・5・6図、図版12の1・3・4、13の1・2）X95Y270地区付近で、1号住居跡の東約30mに位置する。調査区の東端に位置し、ほぼ全体を検出したが、一部攪乱を受けているのが惜しまれる。長径約5m、短径約4mのほぼ円形に近いプランの住居跡である。床は基盤となる面を10～15cm掘り込んで作られている。柱穴は、16箇所検出したが、主体をなす柱穴は、P2-1～5の5カ所と考えられ、全体としては、6本前後の柱が主体をなすXY型（橋本1976）の配列の住居跡と考えられる。柱穴は、床面から30～60cmとしっかり掘り込まれており、柱穴の径も30cmとほぼ一定で、残存状況もきわめて良好である。住居跡は、全体に火を受けており、炭化物や、焦土が各所で検出された。出土遺物も多く、擦石、砥石、石棒、などの石器、縄文土器などがある。炉跡は、住居跡のほぼ中央で検出された。西側に開口部をもつ長方形の石組み炉である。70×45cmの規模で、炉床となる土器を敷き詰めた面までは、約10cm、その直下が基盤の面で約13cmである。開口部分はやや掘り込まれており、床面から約15cmを測る。使用されている縁石は、砂岩で7個の石で組まれている。この内の4個は、全長47cmの幅約12cmの細長い紡錐形の石材1個を4つに割って使用しており、4個を組合わせると復元できる。もともとこの石材は立石として使用されていた可能性があり、石棒とあわせこの住居跡の特殊性を物語るものと考える。炉の内部には縄文中期の深鉢の破片がひき詰められている。炉の東側には砂岩質の擦石が置かれており、火熱のため風化が激しく、取り上げることができなかつた。この炉跡の北側に隣接して、土壙SK1がある。径約1mで、深さは床面から約20cm程度の浅いものである。石棒は、住居跡南東側に出土した。全長約70cmの砂岩質のもので全体に火を受けている。これは、基底部の形状からP-15に立てられていたことが確認される。住居の主柱P-4の傍らで男茎を表現するための刻線が住居の外側を向く形となる。住居の入口は北西側と推定され、この石棒の反対側からと考える。つまり、この住居の入口に立つと、その正面に、石棒が見て取れることになる。住居跡の時期は、出土した縄文土器から中期中葉の初頭と考えた。

3号住居跡（第3・5図、図版12の2）X95Y270地区付近で、2号住居跡の東に切り合って検出された。この住居跡は全体の1/4程度の検出にとどまる。プランは、2号住居跡と同様のほぼ円形に近いものと推定され、2号住居跡とほぼ同規模のものと考える。床は基盤となる面を10～15cm掘り込んで作られている。全体の約半分は、2号住居跡建築の際に、削り取られているものと考える。柱穴は9カ所検出されたが、主柱となるものがどれかは判然としない。遺物は、P-3の覆土内から縄文土器をまとまって出土したが、風化が激しく時期ははつきりしない。切り合いから2号住居跡の前段のほぼ同時期のものと考えた。

溝（第3図、図版11の3）溝は、3条確認した（SD01～03）。SD01は、調査区の北西端から現在の県道にそって約17mを検出した。縄文土器・石器を出土するが、断面観察から近世の溝と考える。

SD02は、X216Y103付近からX249Y100付近までの約31mにわたって検出された。現在の県道にはほぼ平行にはしるも

ので、幅約30cm深さ約30cmの堀肩のしっかりした遺構である。溝内からの出土遺物は、須恵器の壺蓋2点で出土数は少ないが、古墳時代末から奈良時代のものと考える。旧道の側溝と考えられるが、X249以東は、攢乱により消失している。前回調査の際、の1区溝01（2号住居跡に切り合って、幅30~70cm、長さ東西約10mにわたって検出された。）の続きと考えられる。

SD03は、1号住居跡に切り合って検出された。SD01によくにた堀肩で、やはり近世のものと考える。

土壙・穴（第3図、図版11の1・2）穴は、全体で約100ヵ所検出したが遺物を含むものはわずかであり、時期を決めかねる。穴のまとまりを見ると住居跡があったものと考えられるが、戦後の牧草地の耕作の際に、住居跡のほとんどが削り取られたものと見られ、その復元までにはいたらない。住居跡と考えられる部分は、X220~230付近の穴群、X255付近の穴群である。両地区とも縄文土器が散布するが、時期までは、明確ではない。ただ、X220、Y103から玦状耳飾りが1点出土している。この遺跡の700m東に所在する極楽寺遺跡との関連が考えられる。

2. 遺 物（図版2~9・14~20）

遺物には、縄文土器・石器と、須恵器がある。遺物の中で最も多いのが縄文土器で包含層からの出土遺物もあるが、戦後の牧草地の耕作により包含層のほとんどが破壊されわずか数センチを残すのみである。最も遺物が集中するのは2号住居跡、3号住居跡付近で、搬入路であったため、破壊を免れたものである。縄文土器は、中期中葉のものが主体的である。須恵器は古墳時代末から奈良時代のものと考える。

A. 土 器

出土した縄文土器は、遺物整理箱でおよそ5箱分ある。以下、遺構ごと、図版ごとに概略を述べる。

2号住居跡（図版4の1、図版5、図版6の1~12）図版4の1は、炉跡内部に敷き詰められていた土器である。2次焼成を受けた結果やや歪みがあるものの。全体のほぼ半分の破片が存在し、復元できたものである。口径約45cm、高さ約33cmで、比較的大きな深鉢である。口唇部は粘土帯を外側に折り返して肥厚させ口縁部全体を外反させている。口縁から胴部にかけては、くびれをもって膨らみ全体にRLの縄文を施す。頸部はこの縄文を削るようにして無文帯を作りだしている。一見したところ気屋式土器に類似した形であるが、縄文の粒が大きく中期中葉の土器と考えた。図版5の1はSK01、2・4・5・9・10はSP01、6はSP02、7・8はSP03、16・17・22・23はSP06、11・13~15・18は炉跡の東側の一括土器、3・12・19~21・24~40、図版6の1~12は住居跡覆土内からの出土遺物である。縄文を施したものが多いが、縄文粒はいずれも比較的粗い。また、どの遺物も火を受けており、赤みかがったり、黒ずんだりしている。この内、19・27・32・35は、隆起線文あるいはこれと連続爪型文により構成された施文なされる。特に19は、中期中葉の特徴がよくでた施文がなされている。11・13~15・18は炉跡の東側に埋設された小型の土器で同一個体のものである。炭壺など火に関連した土器である可能性がある。

3号住居跡（図版6の13~42）3号住居跡からの出土遺物は、すべてSP03からの出土遺物である。縄文による施文がほとんどである。この内、13は、キャリパーの口縁部である。肥厚した口唇部を内弯させたもので口唇部直下から縄文による施文がなされる。縄文中期中葉の遺物と考える。

土壙・穴・溝（図版6の43~60）43~51、53~56は、SD01からの出土遺物である。前述のようにSD01は、近世の溝でそのなかに流入した遺物であり、風化が激しい。前回調査で見られた纖維土器は確認されず、いずれも中期の土器の様相が強い。52はSK01、55はSX02、57~59はSX01、60はSP01の出土遺物である。いずれもそれぞれの遺構に流入した遺物と考えられる。このうち48・59・60は内外面に条痕による施文がなされており、縄文前期の様相がみられる。

包含層（図版7の1~38）包含層は、前述の通り数センチしかなく、遺物量も少ない。また、調査区全体に分布しているとは言い難く、耕作の影響を受けやすい東側では遺物は、遺構のみに限られるといってよい。ここに掲載した

遺物の多くは、縄文前期末から中期前葉の遺物が多く、前回調査した1区東側の遺物と年代的に一致するものが多い。この事から今回の調査地区の西側は、縄文前期末から中期前葉の縄文遺跡の東端と考えられ、今回の調査区の東側は縄文中期中葉の別の遺跡と考えられる。しかしながら、牧草地の耕作によりそのほとんどが影響を受けており、遺物量、遺構数とも数少ないものと考える。

C. 古墳時代（図版7の39・40）古墳時代の遺物は、2点出土した。いずれもSD02からの出土遺物で遺構の年代を決定する遺物である。いずれも須恵器の壺蓋である。39は、天井部が高く入念な範削り調整が時計方向に行われている。口縁端部が外反歯、口唇部は平坦である。6世紀前半の遺物と考えたい。40は、高い天井部、幅広く、入念な範削り、などの特徴に加え、天井部と体部との境に窪みを巡らせ、鋭く突出した稜を巡らせるものである。39より古い様相をもっており、5世紀末ないし6世紀初頭の遺物と考えた。これらは、いずれも古墳時代の遺物であり、畿内などの地域からもたらされたものと考える。前回調査で、管玉・鈴などの出土遺物が溝跡から出土しているが、これに続く溝から年代を示す出土遺物があったことから、古墳などの遺構が周辺にあった可能性がますます高くなったものと考える。

B. 石 器

出土した石器は、遺物整理箱でおよそ6箱分ある。以下、遺構ごと、図版ごとに概略を述べる。

2号住居跡（図版2、図版3、図版4の2～5）図版2の1は、2号住居南西部分から出土した石棒である。全長63cm、最大幅21cmの長形の砲弾型のものである。断面形は、楕円形に近い。石材は、砂岩で、全体に火を受けており、非常にろく、数箇所の亀裂も生じている。いわゆる単頭石棒で、男根の亀頭部分を表現するために、逆V字状の刻線が施されている。石材全体を丁寧に磨いたり、鍔状の突起を巡らすものと違い、自然石に刻線を施しただけの粗製のものである。「遺構」の部分でも記述したとおり、基底部の形状からP-15に立てられていたことが確認される。住居の主柱P-4の傍らで刻線を施した面が住居の外側を向く形となる。住居跡出土の土器から縄文中期中葉の初頭のものと考える。図版2の1は、砂岩質の擦石である。長径25cm、短径17cmの楕円形のもので、住居跡覆土内からの出土遺物である。図版3の1・2は、砥石である。1は、非常に目の細かい砂岩質の石材を利用したもので、使用面は平滑である。一部破損箇所はあるが、全長35cm、幅約27cmの長方形のもので、断面形は、舟形に近い。出土位置は、P-1の南側で柱穴に覆い被さるように出土した。2は、3条の細長い使用痕を残すものである。石材は、1と同様のきめの細かな砂岩の自然石を使用している。全体の半分を残して他は失われている。出土位置は、1の南側で、P-8に、覆い被さって出土した。1・2両者は、磨製石器の製作用のものと考えられ、1で平坦面を磨きだし、2で断面を磨きだしていたものと考える。この2つの石器は、いずれも大型で使用中の欠損であるとは考え難く、また、被熱の跡がないことなどから、故意に打ち割られた物と考えたい。図版4の2・3・4はいずれも擦石である。石質は、いずれも凝灰岩である。出土位置は、2が石棒の出土地点の北側で、他の2点は、覆土内の出土である。5は、炉跡の縁石として使用されていた石材のうち4個を組合わせて復元した。紡錐形の細長い砂岩質の石材を側面からおそらくタガネ状の工具で一撃して4分割したものである。全長約47cm、最大幅約17cmのもので、この頭部にかりに刻線を施したなら、前述の石棒と酷似したものとなる。炉跡の縁石として使用される前は、いわゆる立石として使用されていた可能性が高いものと考えた。

溝・穴（図版8の1・3・4、図版9の1・9）図版8の1は、石皿と考えられる。偏平な凝灰岩の方形の石を加工し整形して作られている。SD01から出土したが、覆土上層からの出土であり、溝の年代からは離れたものと考える。3・4は、いずれも擦石である。SX01からの出土品でいずれも凝灰岩質の石材を使用している。図版9の1・9は、擦石と引き白である。1は、両端部に打痕が残り、転用されたものと考える。9は、中近世の遺物である。

包含層（図版8の2・6～12、図版9の2～8）図版8の2は石皿、6～8は磨製石斧、9は擦石、10は砥石、11

は剝片、12は玦状耳飾りである。9を除いていずれも欠損品である。石質は、2・6・8・9は砂岩系の石材を使用しており、7は、蛇文岩、10・11は、安山岩を使用している。12の玦状耳飾りは、X225Y103で出土した。付近の土壌、柱穴から住居跡が有ったものと考えられる地区からの出土遺物である。石質は、ヒスイと思われるが、不純物を多く含み質のよいものとは言い難い。径約2.3cmの環状品の一部に切れ目をもつもので、上部がやや平で全体的に見ると、方形の趣がある。本遺跡の東方約700mに所在する。縄文時代前期初めの極楽寺遺跡から出土するものと酷似しており、その関連が気にかかるところである。しかしながら、縄文土器など時代を決定するにたる遺物が少なく、判然としない。図版9の2～8は、X214～222までの調査区西側の地区から出土したものである。2・3・4は、蛇紋岩製の磨製石斧である。2・3は、一見したところ局部磨製石斧のように見えるが、粗く整形した後に磨いた未製品の遺物と考える。2号住居跡で石器製作が行われていたことを前述したが、他の住居跡に置いても石器製作が有ったことを物語るものと考えた。5・6・7は打製石斧の欠損品である。石質は、いずれも安山岩である。打製石斧は全体に出土量が少なく、掲載したもの以外には、出土しなかった。6は、その中でも良品で復元すれば定角形の身幅の厚いものである。

以上であるが、出土遺物全体を見た場合、土器類の出土数が、石器の出土数に比べてやや少ない感がある。攪乱などの後代の影響を加味してもこうした傾向が大きく、また、石器の未製品なども目立つ事や、石器製作のための砥石の出土などを考えると、この地区が石器製作に関わる遺跡であった可能性が高いものと考える。

V　まとめ

前章までの調査結果を踏まえて、今回の調査のまとめを行いたい。

今回調査した地区では、縄文時代中期中葉と古墳時代前期の2時期の遺構遺物を確認した。いずれも牧草地の耕作のため包含層が削られ、必ずしも残存状況がよいとは言い難いが、特徴的な遺構や、遺物が見られ、各時代に置ける本地域の特異性がうかがわれた。

縄文時代中期中葉の遺構としては、2号住居跡が上げられる。ここは、農地の搬入口となっていたためにからくも残った遺構である。この住居跡から出土した石棒は、その埋設位置が明確であり、縄文中期の室内祭祀の一端を示す良好な資料となった。県内に置いてこれほど良好な資料は、立山町「二ツ塚遺跡」に次いで2例目となる。出土した石棒は、彫刻石棒で、男根を示すために逆V字状の刻線が施されただけの簡素な作りのものである。鍔付きの石棒などと比べると、より初現的なものと考える。出土遺物の章でも述べたとおり、縄文中期中葉の初頭と考えられるが、小島俊彰氏が、彫刻石棒の出現期を中期中葉に置いている点を考えると、それを裏付ける調査結果と考える。また、炉跡の縁石に使用されていた立石と思われる石材は、巧みに4分割されたもので、石器などの製作に秀でた者の作業と考えた。かりに、この石材が祭祀を目的とした立石とするなら、この炉跡は、単に、暖炉あるいは、煮たきや、家族団欒の場としてのものではなく、祭祀に関わる施設として捉らるべきものとなるであろう。2号住居跡から出土した遺物は、この他に、擦石・砥石などの石器があるが、大型の砥石2種は、廃棄されたというよりあたかも据え付けられたかの様に、住居跡柱穴の上に覆い被さって出土した。また、これらの遺物はいずれも、故意に欠損を受けた物と考えられ、住居跡が焼け落ちているにもかかわらず、被熱の跡が観察されない。以上から祭儀の道具としての観点から出土遺物を見た場合、石製品がその祭祀の中心的位置を占めていたものと推察した。

縄文時代の石棒祭祀については、藤森栄一、宮坂光昭、水野正好、桐原健、長崎元広、宮坂英式、山本暉久の諸氏を始め、数多くの方々が、緒論を展開されている。これらの方々の見解は、大きく3つに分類される。1は、縄文農耕と結びつく祭祀とするもので藤森栄一、宮坂光昭、長崎元広の各氏の見解である。2は、狩猟活動に関わる祭祀とする立場で、水野正好、桐原健、宮坂英式の各氏、人類学、民俗学の諸氏もこの立場の見解であるようである。3は、

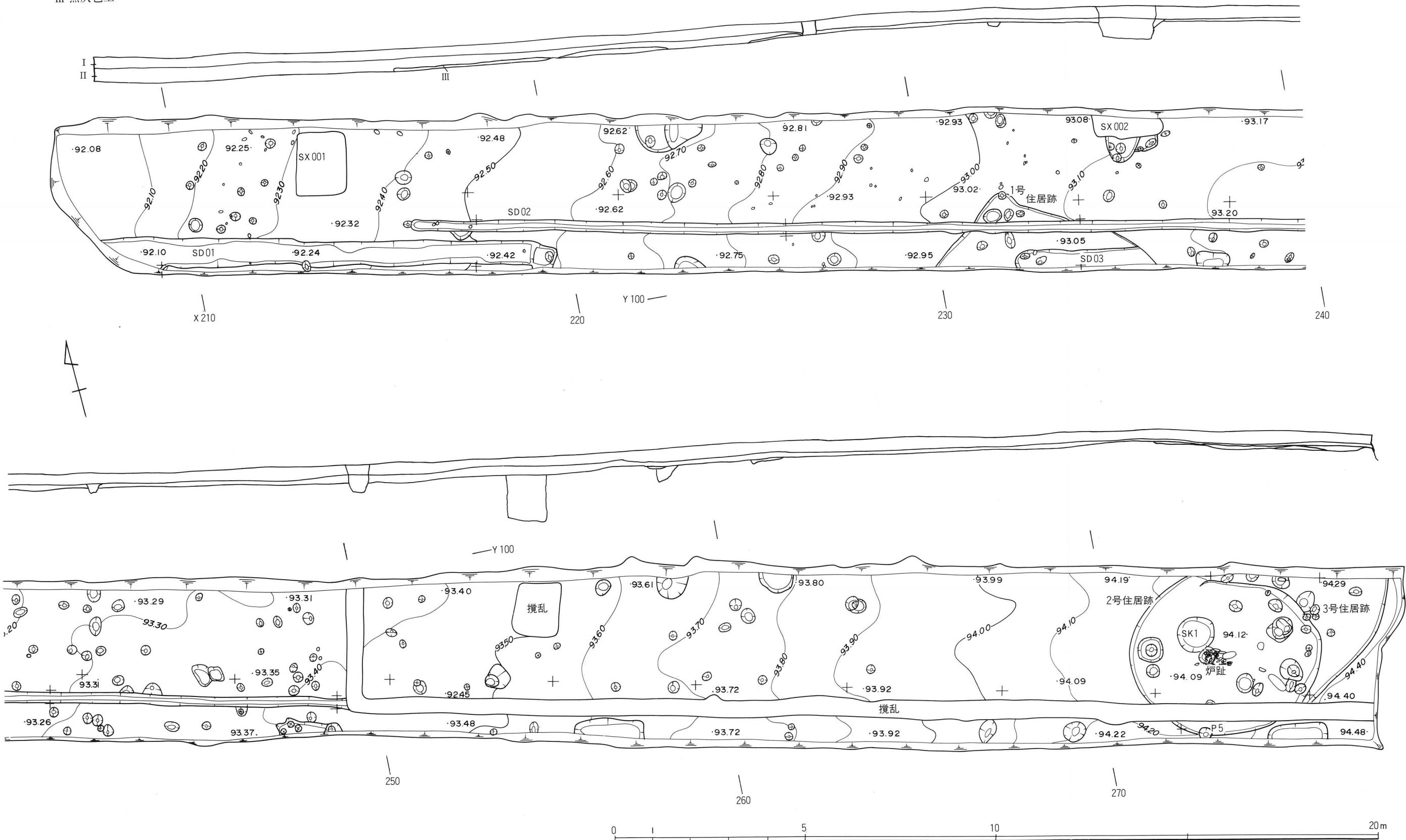
農耕・狩猟に関わらず、広く生産活動全体にかかる幅広い祭祀と捉らえる立場で。山本暉久氏の見解である。山本氏はさらに、石棒祭祀が、1・2の所説が、共同体員全体の祭祀と捉らえているのに対して、個別堅穴成員の個別的な祭祀として捉らえている。最近の調査では、岐阜県宮川村の塩屋金精神社遺跡の発掘調査で、多数の石棒と、その製作にかかる多数の叩き石、砥石が発見され、石棒の製作工房跡として発表された。これら多くの石棒を何のために作ったのか、需要がどこにあったのか、など興味の尽きないところである。

本遺跡の調査は、限定された地域の調査であり、また、完全に調査できた住居跡が石棒の出土した1ヵ所であることから、これ以上の細かな分析は現時点ではできない。しかしながら、検出された住居跡は、明らかに一般の生活跡とは、異なり、祭祀を主目的とした住居と考えられ、個別の住居跡のより詳細な調査が求められていることを示唆するものと考える。

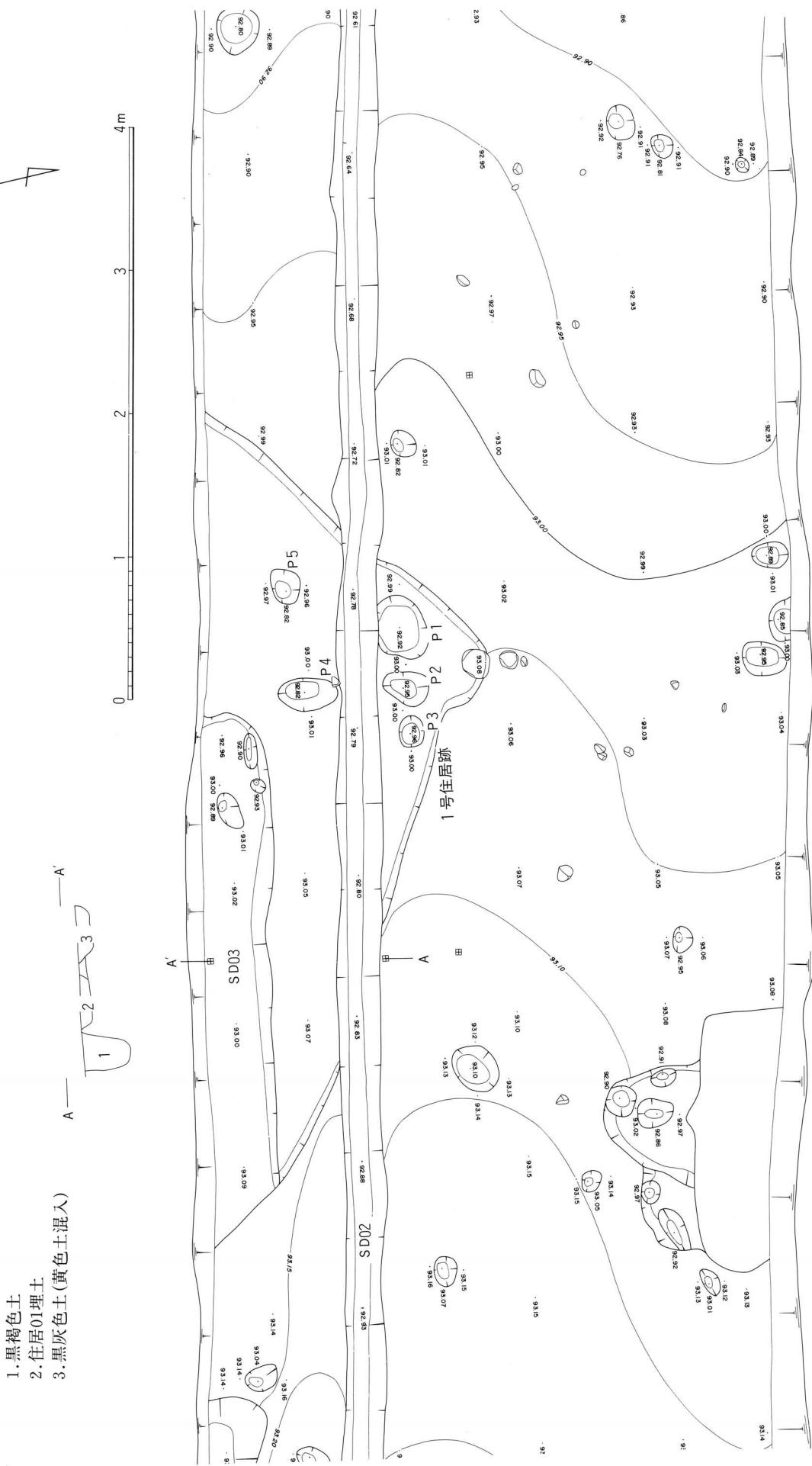
引用・参考文献

- オ 大林太良 1971 「縄文時代の社会組織」『季刊人類学』第2巻第2号
- 大矢昌彦 1977 「石棒の基礎的研究」『長野県考古学会誌』28
- キ 桐原 健 1969 「縄文中期にみられる室内祭祀の一姿相」『古代文化』第21巻第3・4号
- コ 小島俊彰 1974 「北陸の縄文時代中期の編年—戦後の研究史と現状」『大境』第5号
- 小島俊彰 1976 「加越能飛における縄文中期の石棒」『金沢工芸大学学報』第20号
- タ 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- チ 千葉徳爾 1975 「女房と山の神」『季刊人類学』第6巻第4号
- ト 富山県教育委員会 1965 『極楽寺遺跡発掘調査報告書』
- ナ 長崎元広 1973 「八ヶ岳西南麓の縄文中期集落における共同祭式のありかたとその意義(上)・(下)」『信濃』第25巻第4号
- ハ 橋本 正 1976 「堅穴住居の分類と系譜」『考古学研究』第23巻第3号
- フ 藤森栄一 1965 「立石・石棒と特殊遺構」『井戸尻』
- 藤田富士夫 1987 「富山」『日本の古代遺跡13』保育社
- ミ 宮坂英式 1957 『尖石』
- 水野正好 1963 「縄文式文化期における集落構造と宗教構造」『日本考古学協会第29回総会研究発表要旨』
- 宮坂光昭 1965 「縄文中期における宗教的遺物の推移—八ヶ岳山麓の住居址内を中心として」『信濃』第17巻第5号
- 湊 晨・小島俊彰他 1972 『富山県史考古編』富山県
- ヤ 山本暉久 1979 「石棒祭祀の変遷」『古代文化』第31巻第11号・12号
- ギ 岐阜県宮川村 1995 『飛騨みやがわシンポジウム—石棒の謎をさぐる』

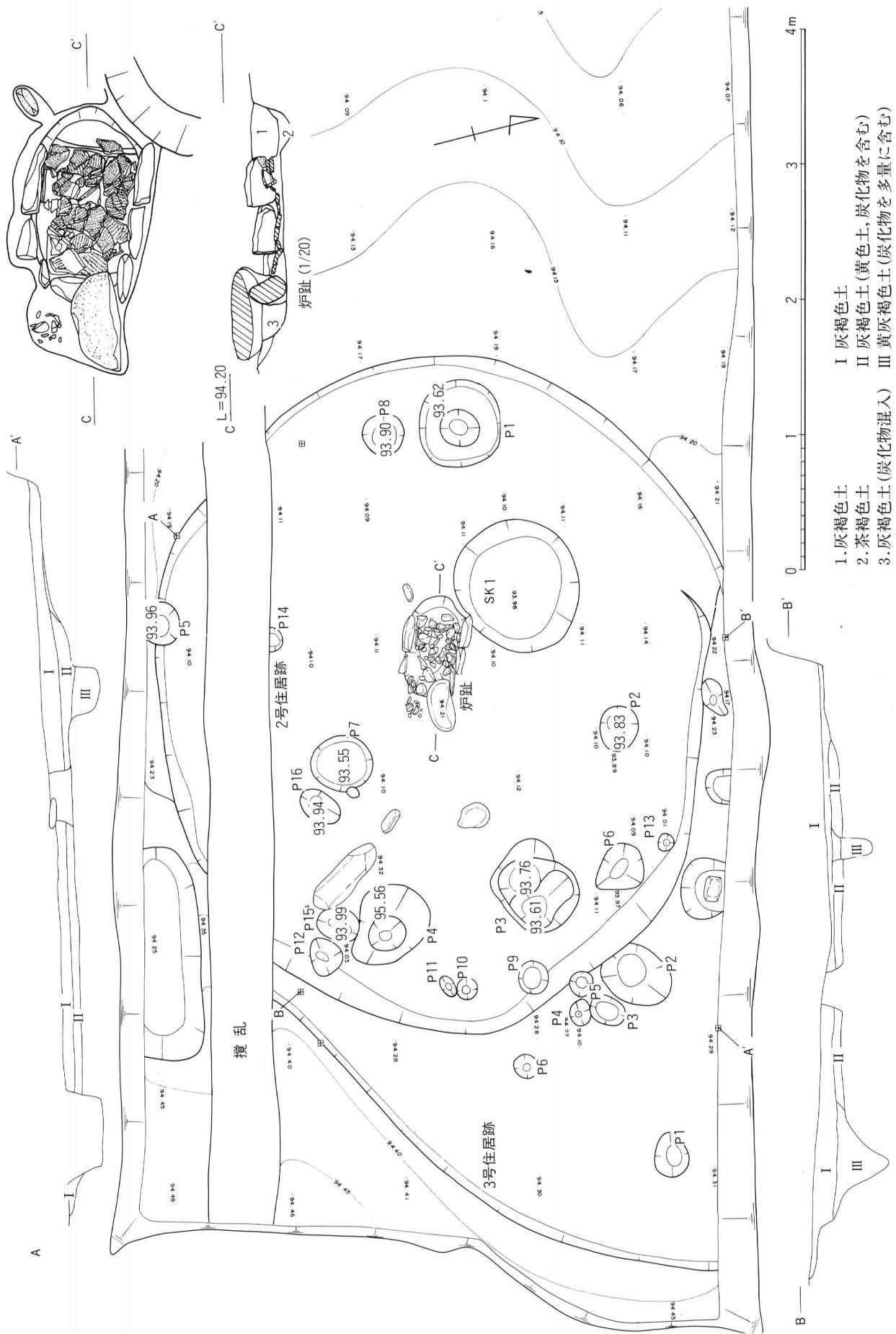
I 耕作土
II 黒灰褐色土
III 黑灰色土



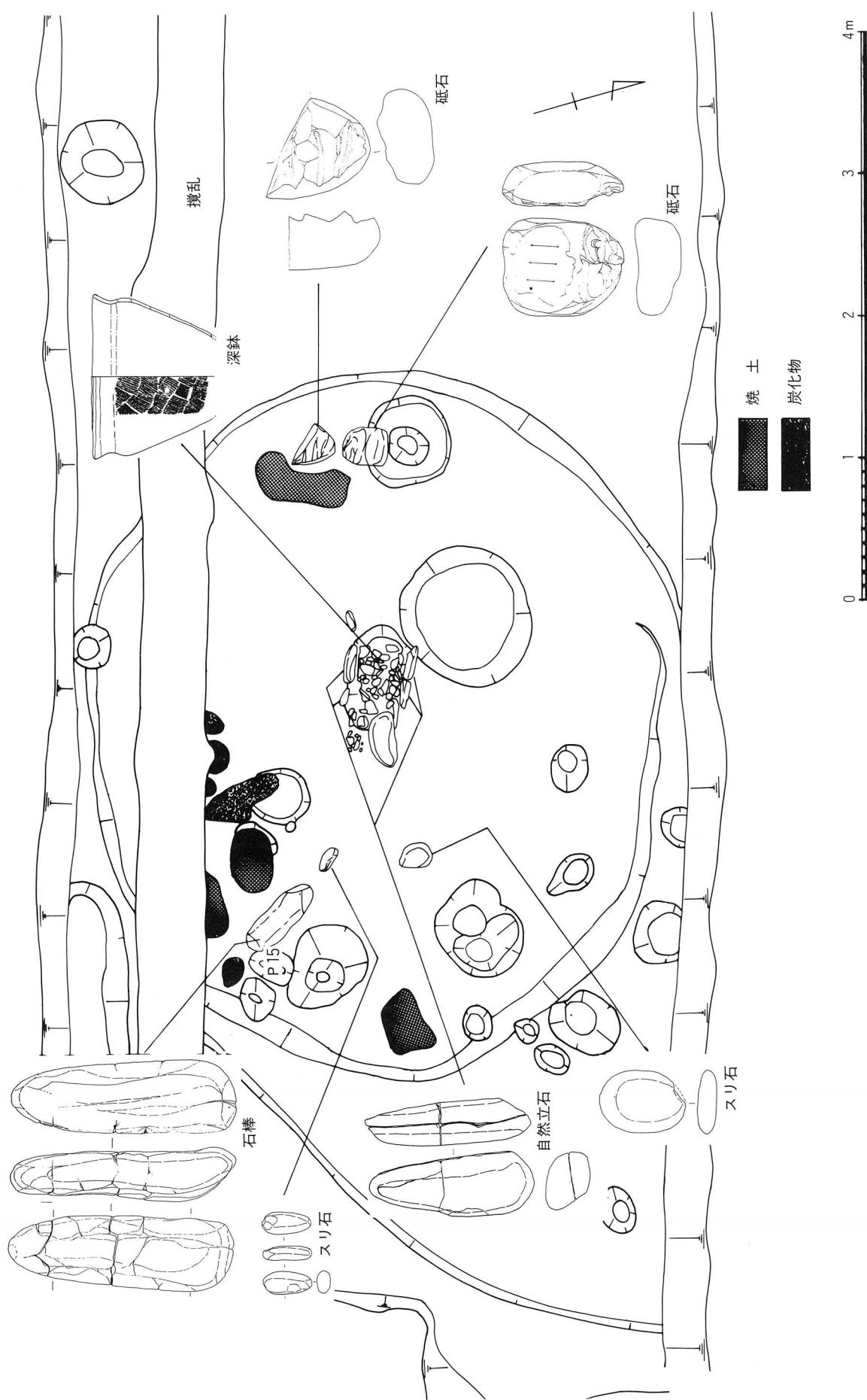
第3図 遺構実測図 (縮尺 1/100)



第4図 1号住居跡平面図 (1 / 40)



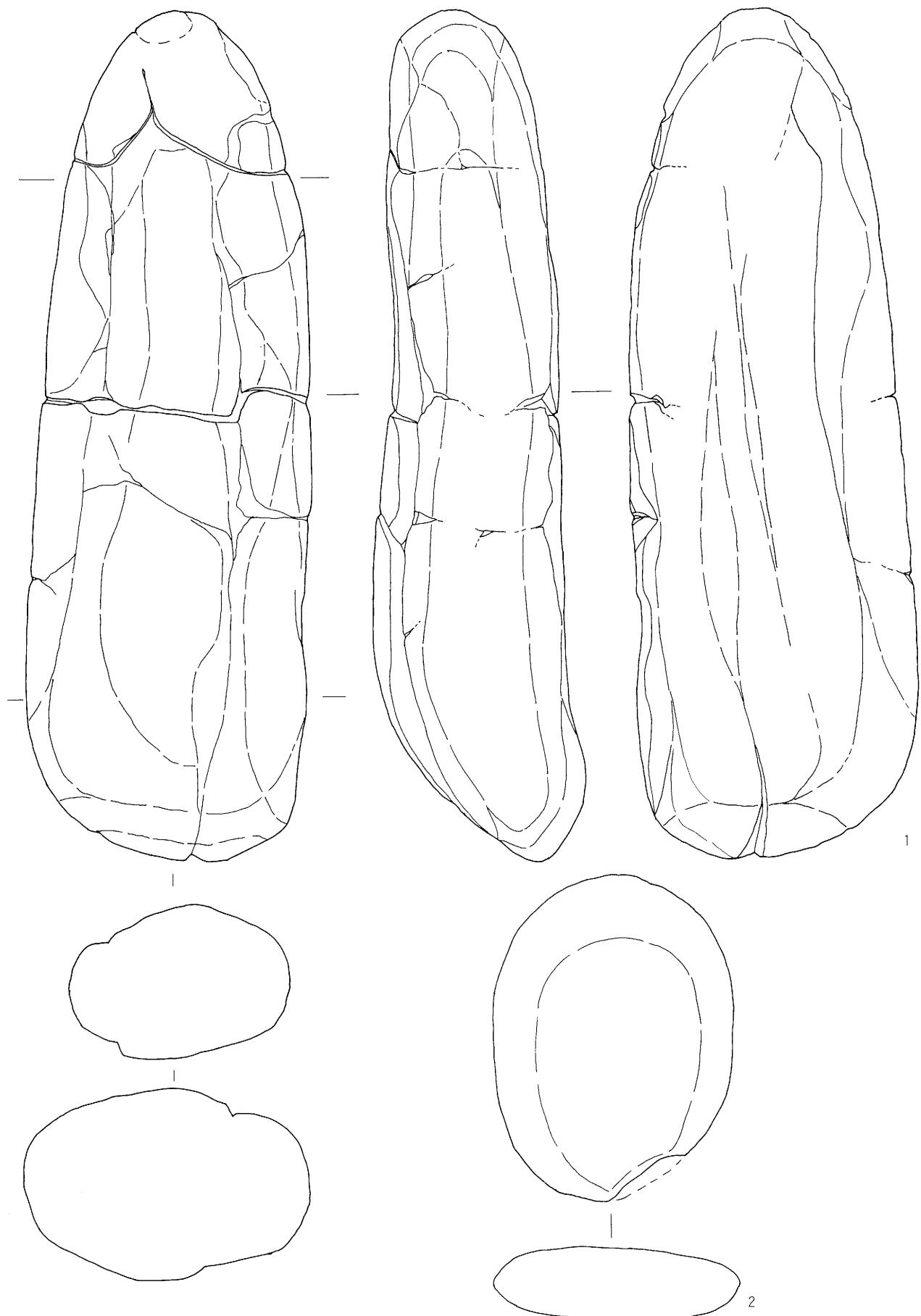
第5図 2号・3号 住居跡・平面図 (1 / 40)



第6図 2号住居跡遺物出土位置図 (1/40)



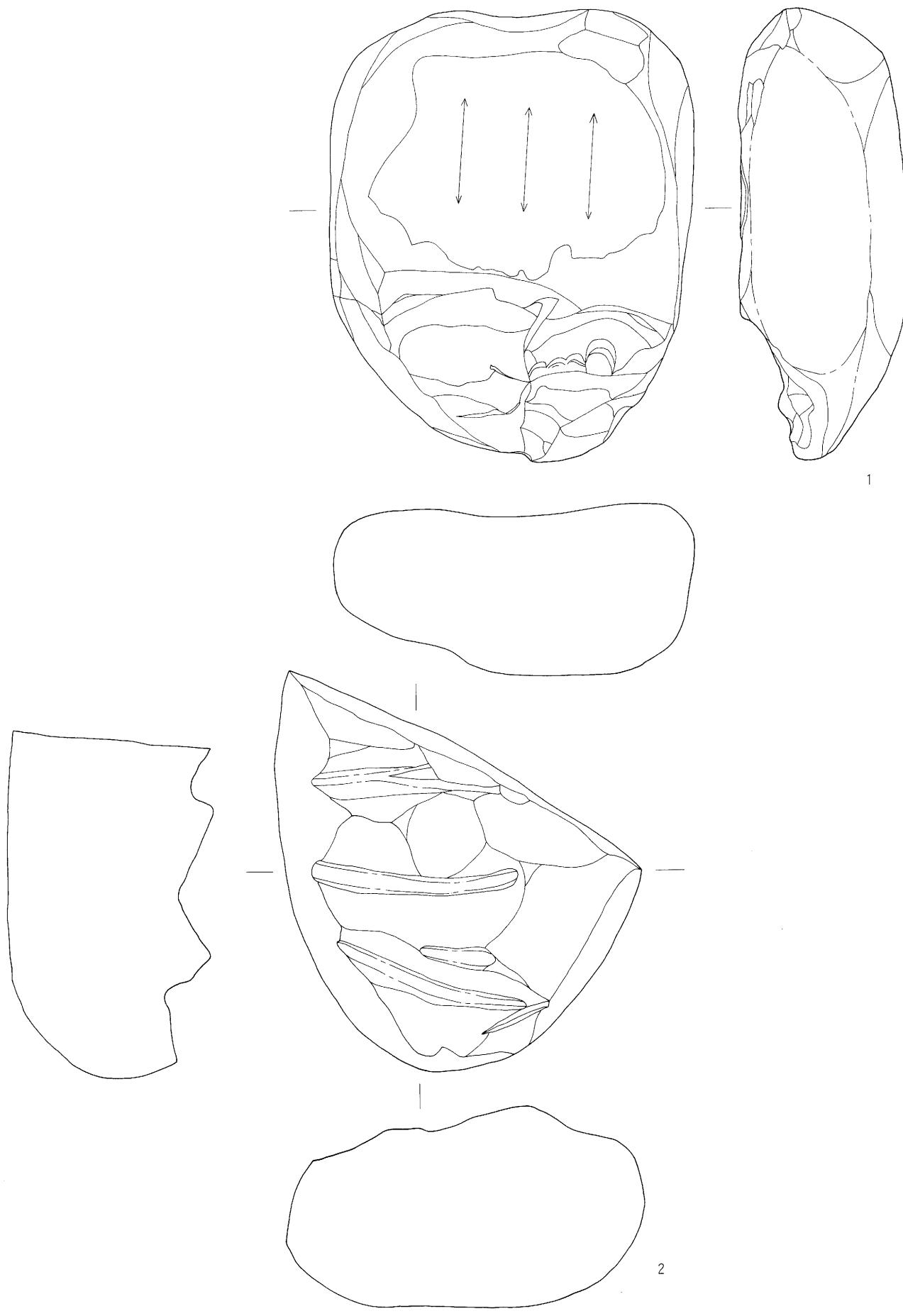
図版1 丸山B遺跡周辺航空写真



図版2 遺物実測図（縮尺1/4）

石棒 住居02：1, 撥石 住居02：2 (図版14参照)

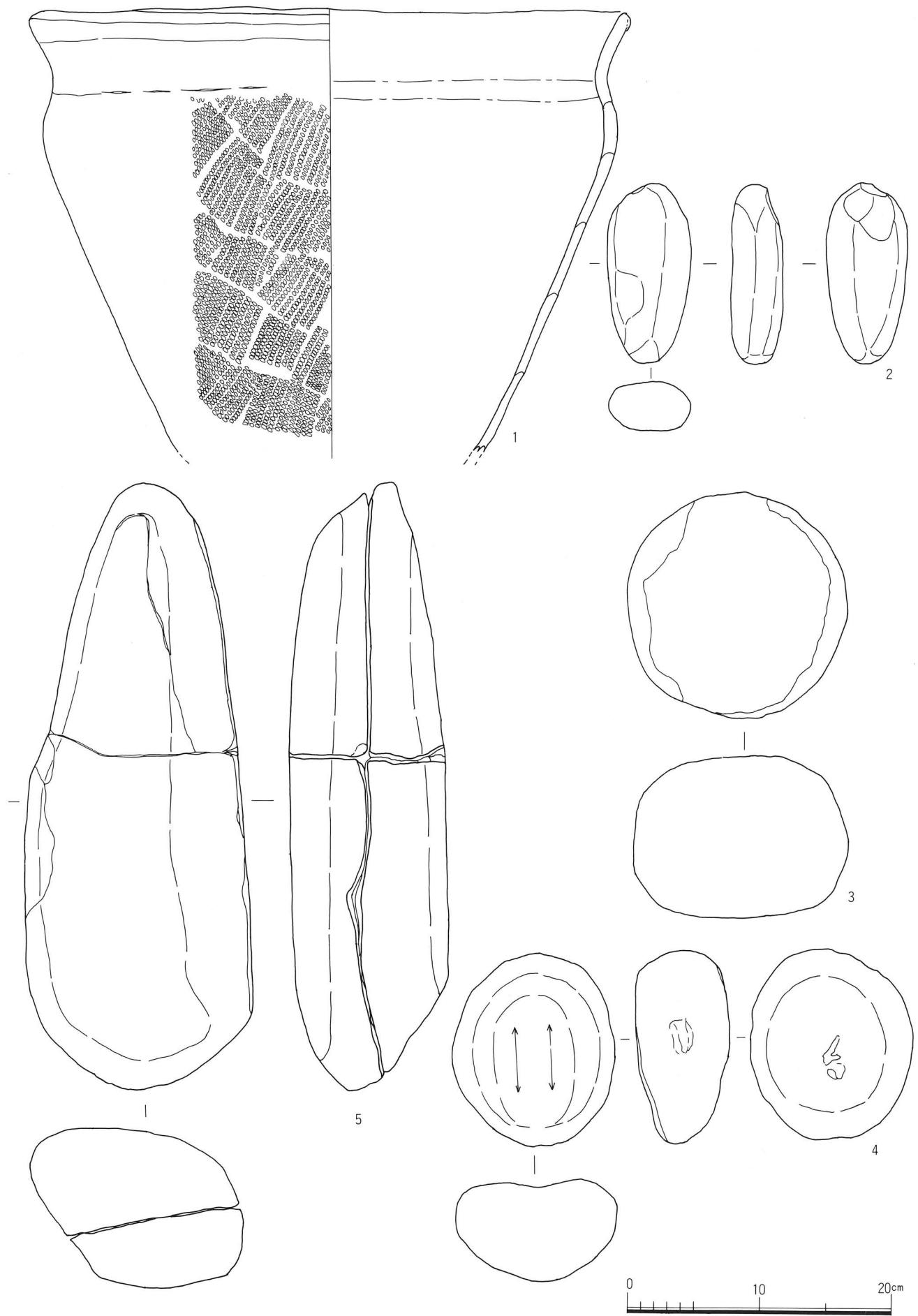
0 10 20cm



図版3 遺物実測図 (縮尺1/4)

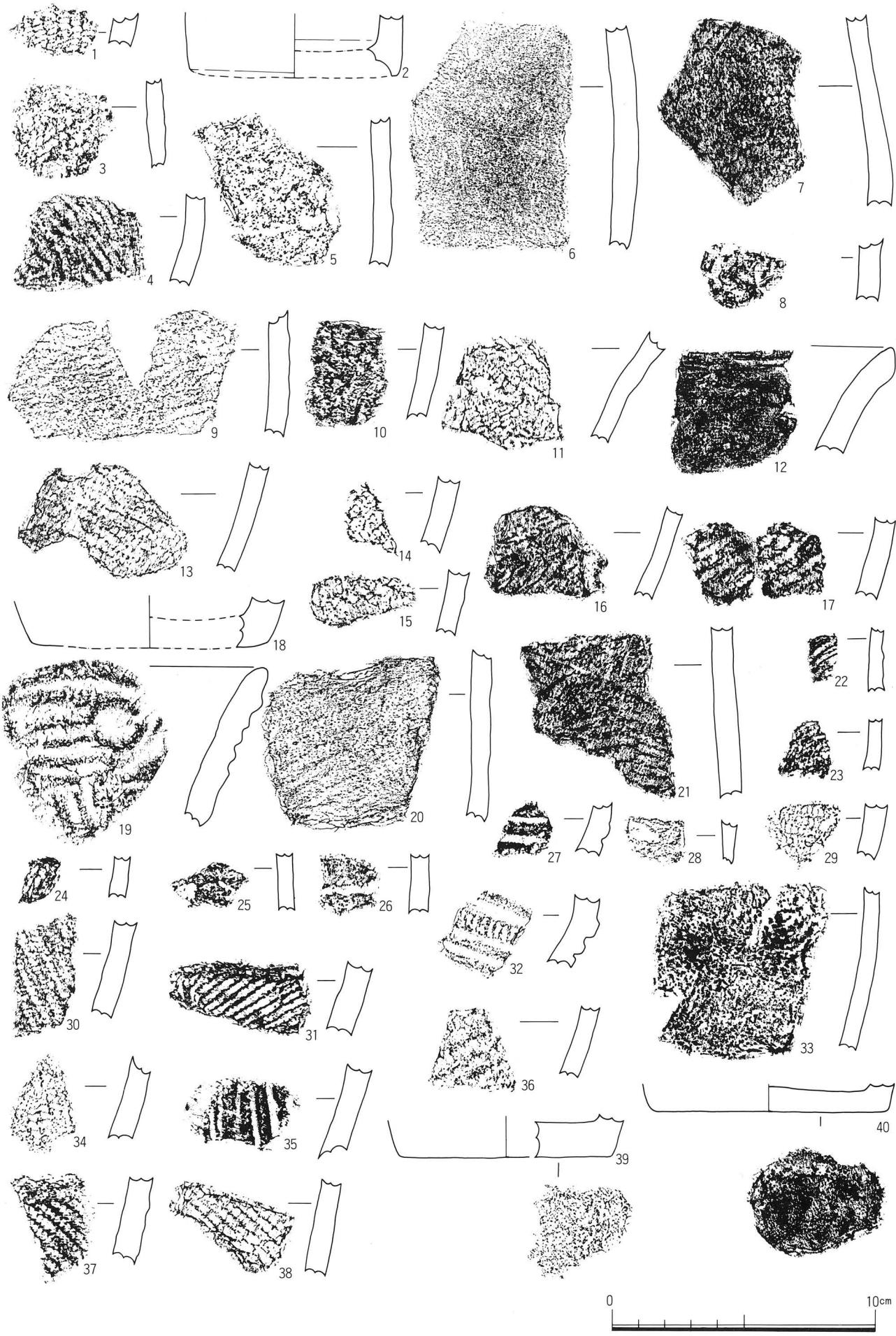
砥石 住居02:1, 住居02:2 (図版15参照)

0 10 20cm



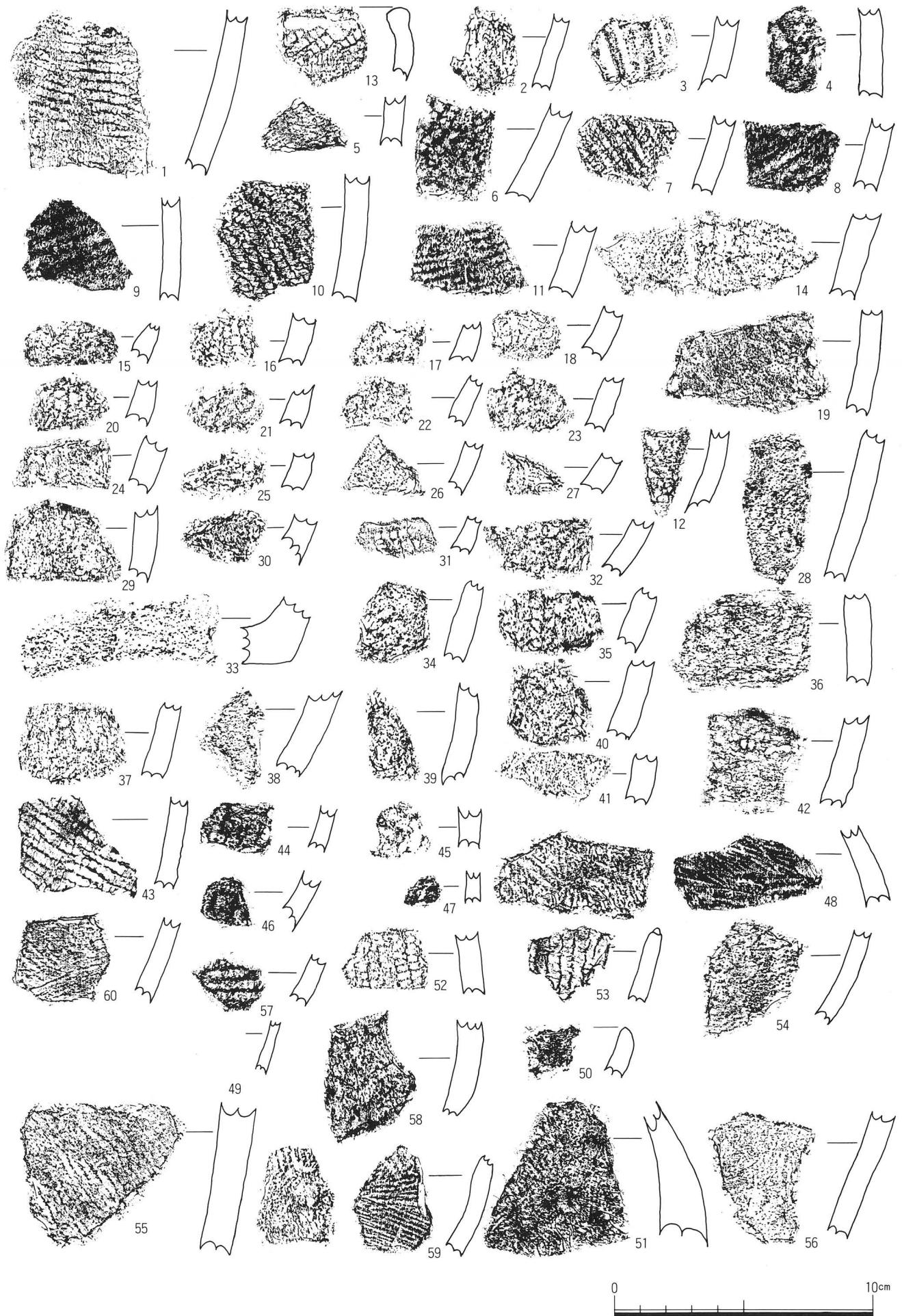
図版4 遺物実測図（縮尺1/4）

縄文土器 住居02：1, 石器 住居01：4, 住居02：2,3, 縁石 住居02：5 (図版14,15,16参照)



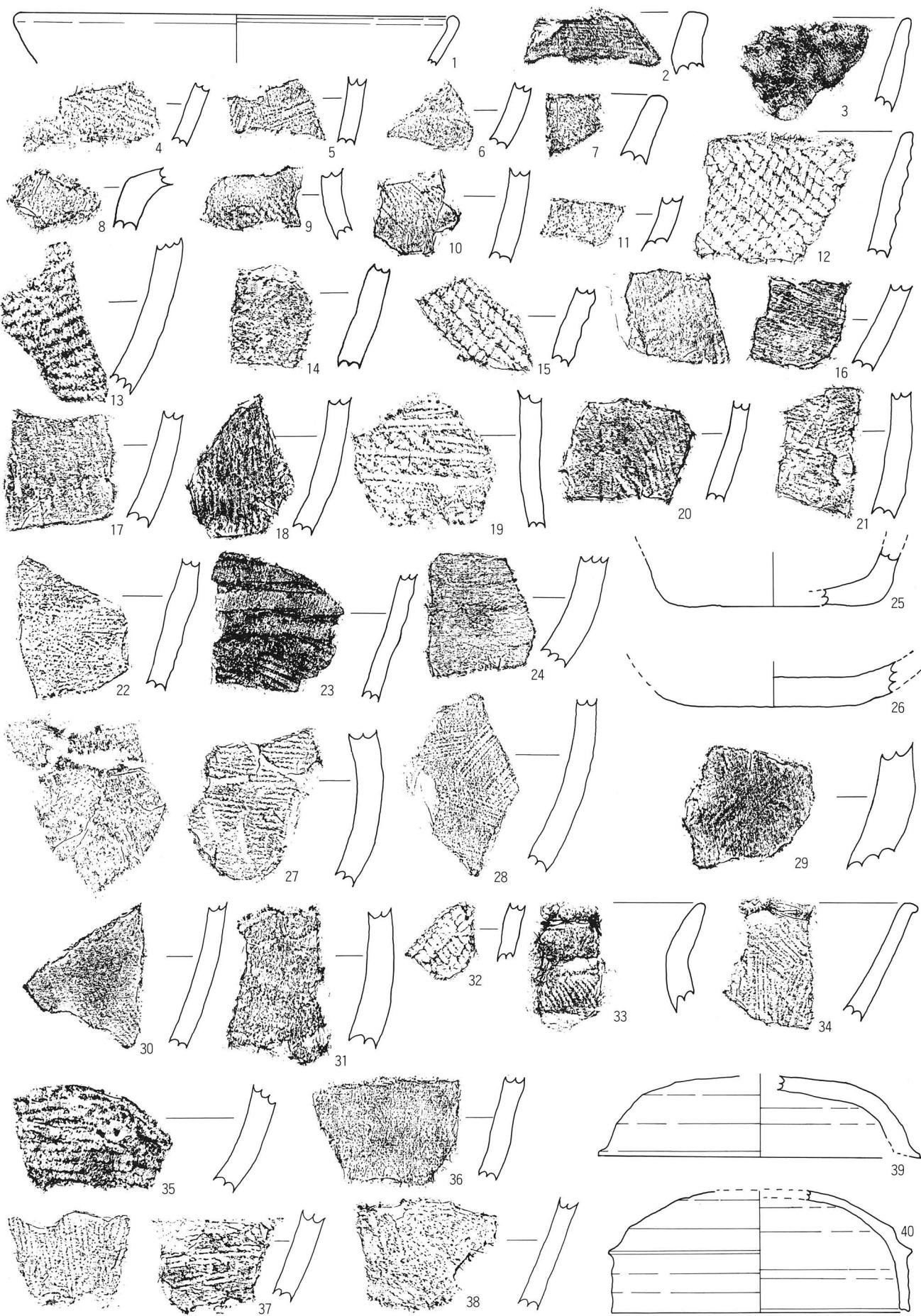
図版5 遺物実測図 (1 / 3)

縄文土器 住居02:3・12, 19~21, 24~40, 住居02内 SK01:1, 住居02内 SP01:2・4・5・9・10,
住居02内 SP02:6, 住居02内 SP03:7・8, 住居02内 SP06:16・17・22・23,
住居02炉趾東:11, 13~15, 18 (図版17参照)



図版6 遺物実測図 (縮尺1/3)

縄文土器 住居02:1~12, 住居03内 SP03:13~42, SD01:43~51, SK01:52, SD01:53~54~56
SX002:55, SX01:57~59, SP01:60 (図版17, 18参照)



図版7 遺物実測図 (縮尺1/3)

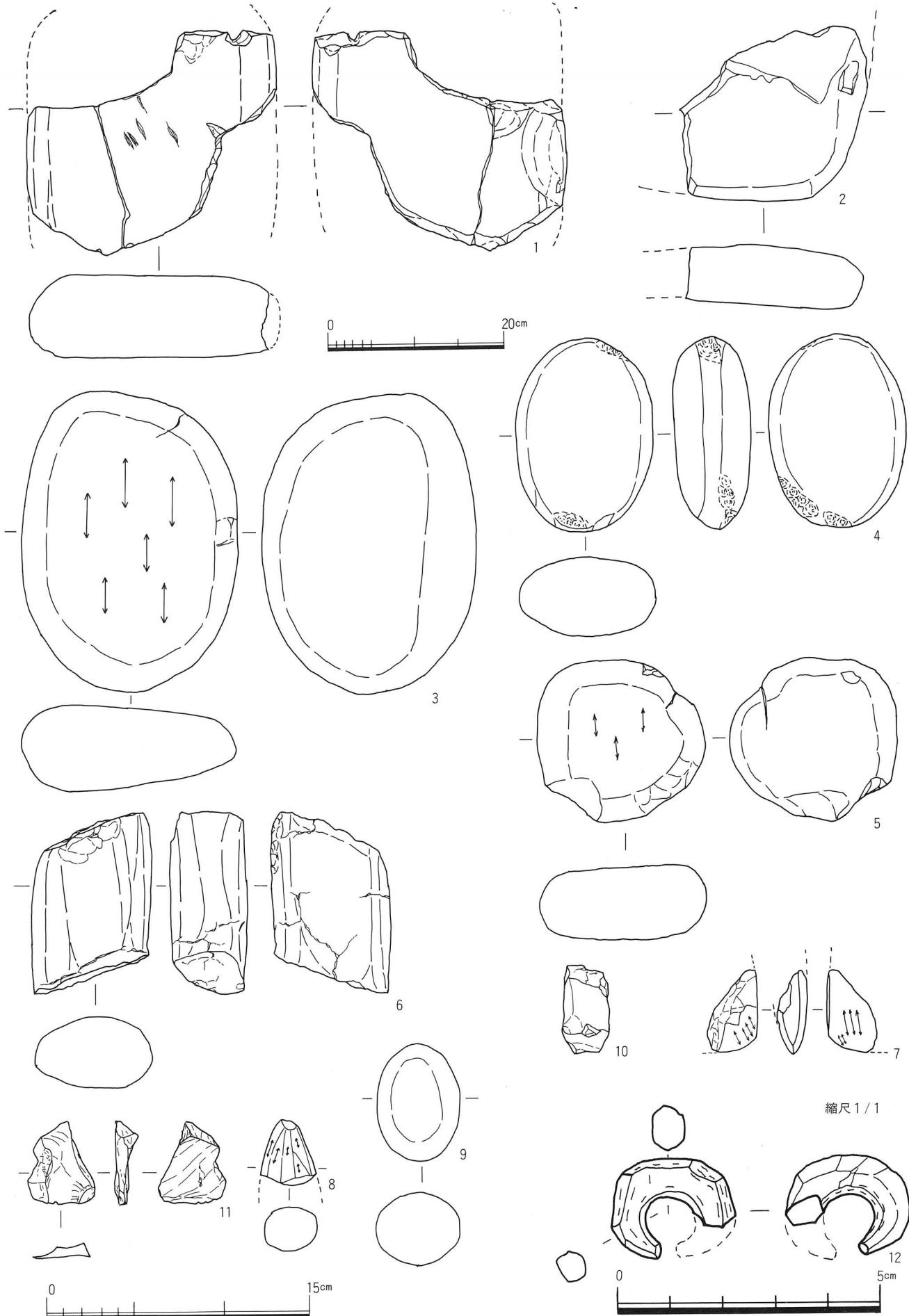
縄文土器 表採: 1, X=206 : 3, 5, 7~9, 10~12, 14, 18, 20~22, 26, 28, 29, 31, 32
Y=105

X=210
Y=106 : 2, 4, 6, 16, 17, 19, 24, 25, 30

X=226 : 13, 34, 36, 37, X=222 : 27, 35, X=218 : 33
Y=103

須恵器 SD2V : 40, X=230 : 39 (図版18, 19参照)
Y=101

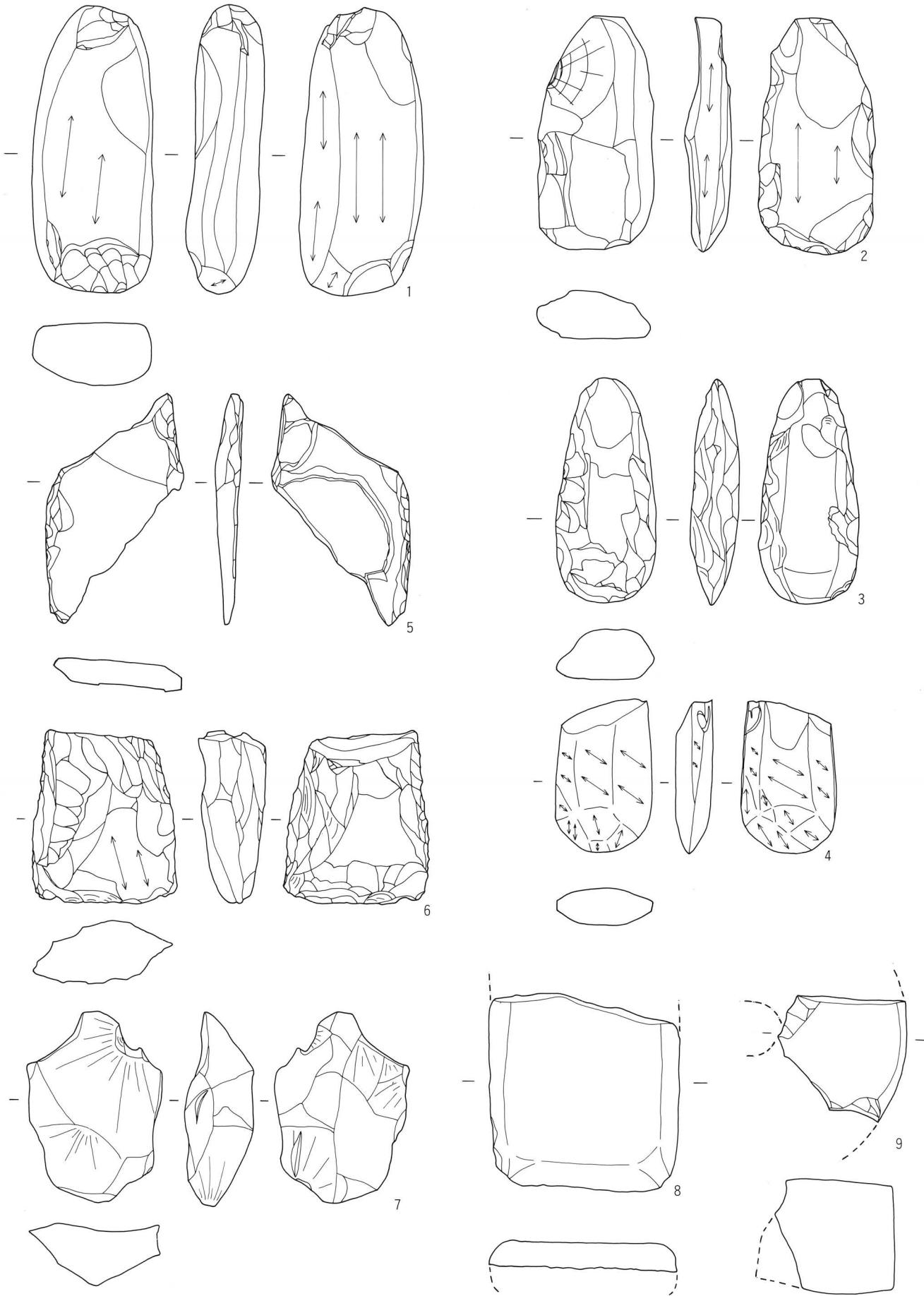
0 10cm



図版8 遺物実測図 (1:1/6, 以下1/3)

石器 SD02:1, SX01:3・4, X=226:5・12, Y=100, X=206:6, Y=103, X=210:7・10・11, Y=100, X=234:8,

X=214:2・9, Y=104, X=225:12 (図版15, 16参照)

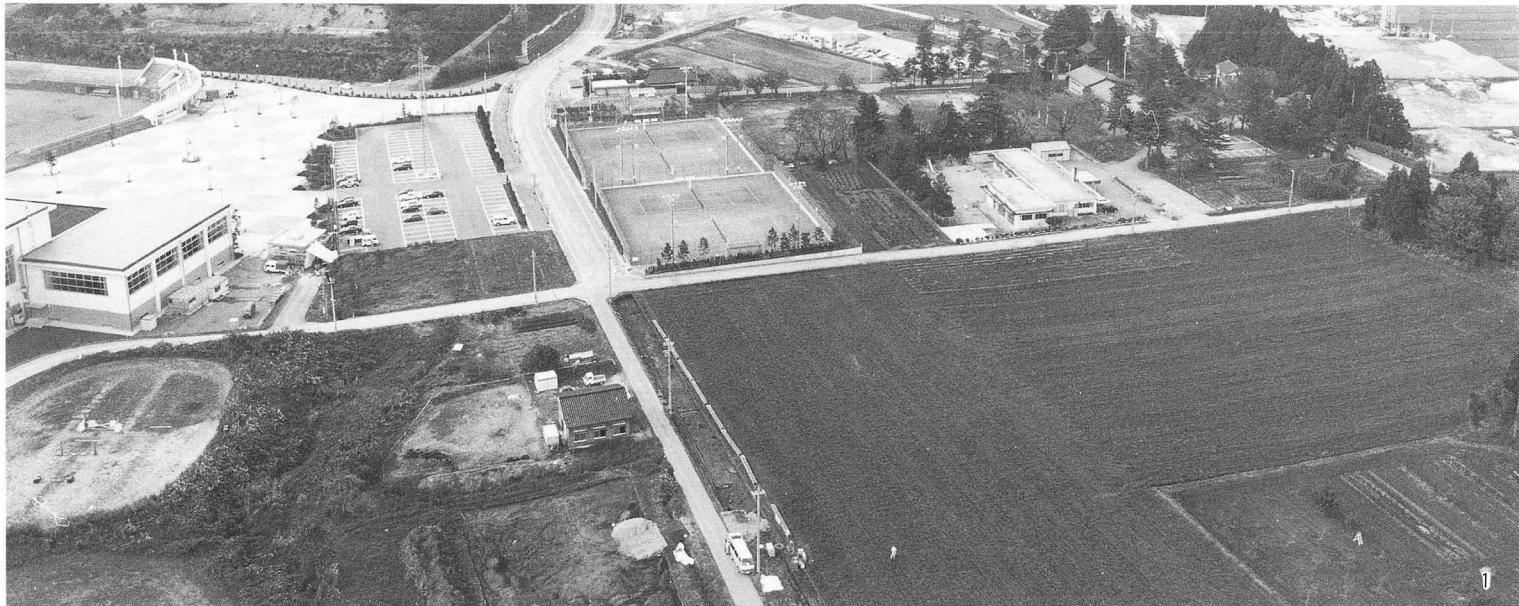


図版9 遺物実測図 (縮尺 1/3・9, 1/6)

石器 SX01:1, X=230:2・3・5, Y=100:4・6・7, X=222:8
Y=104:8

すり臼 SX01:9 (図版20参照)





図版10 1. 遺跡遠景, 2. 繩文時代遺構全景, 3. 旧石器時代調査面全景



1

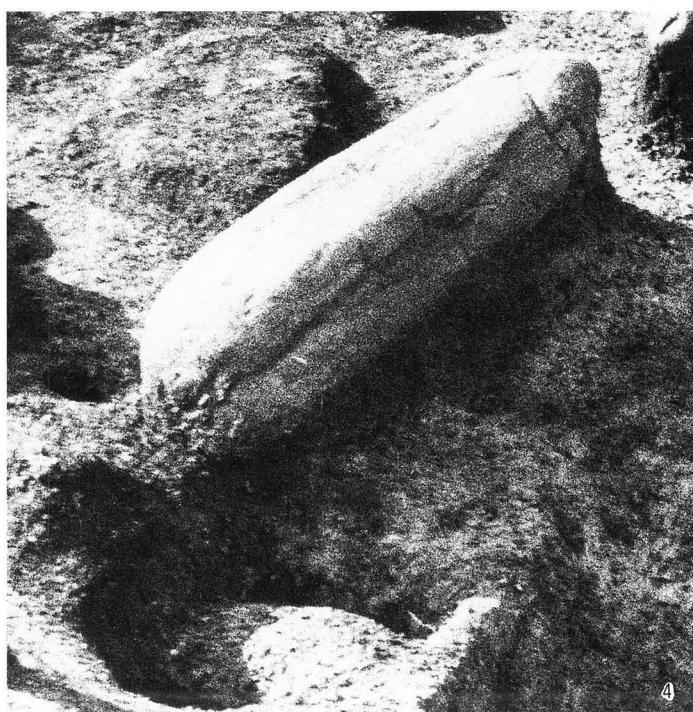


2

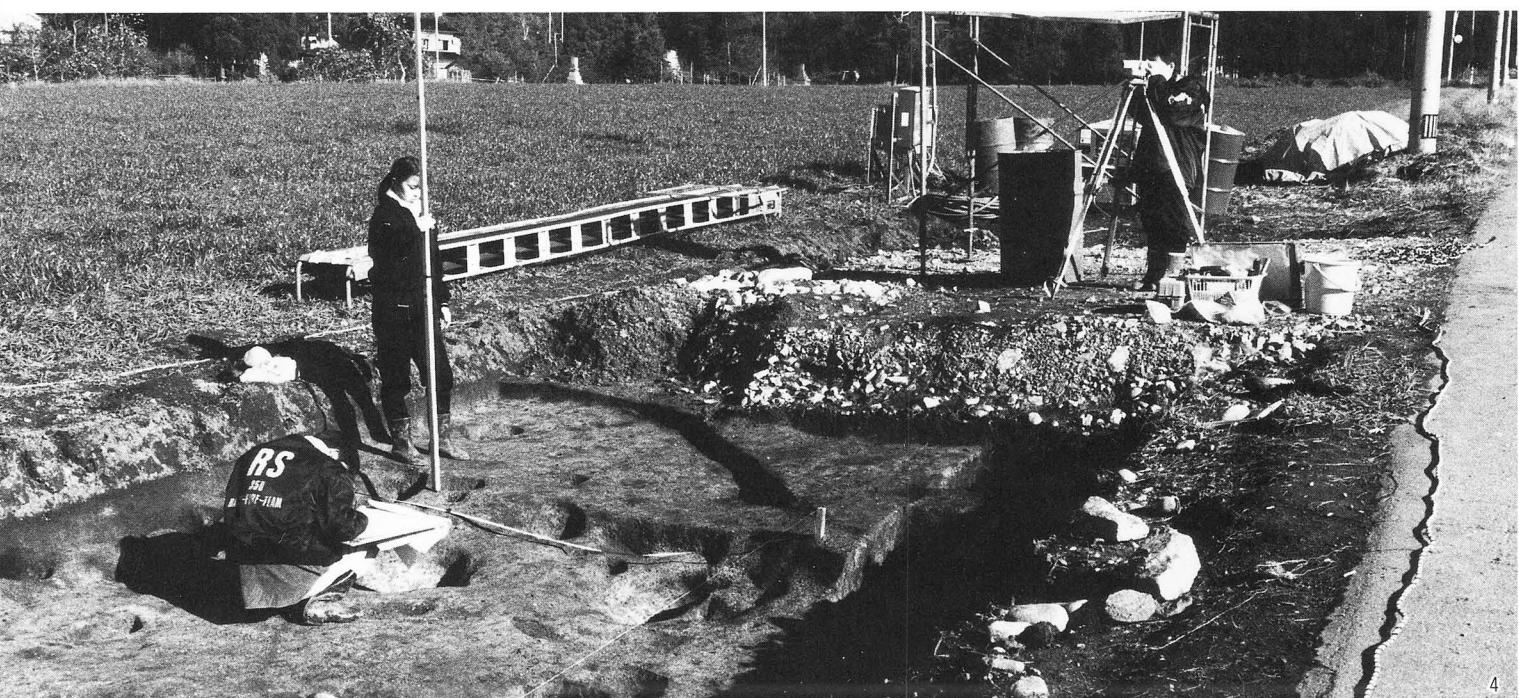
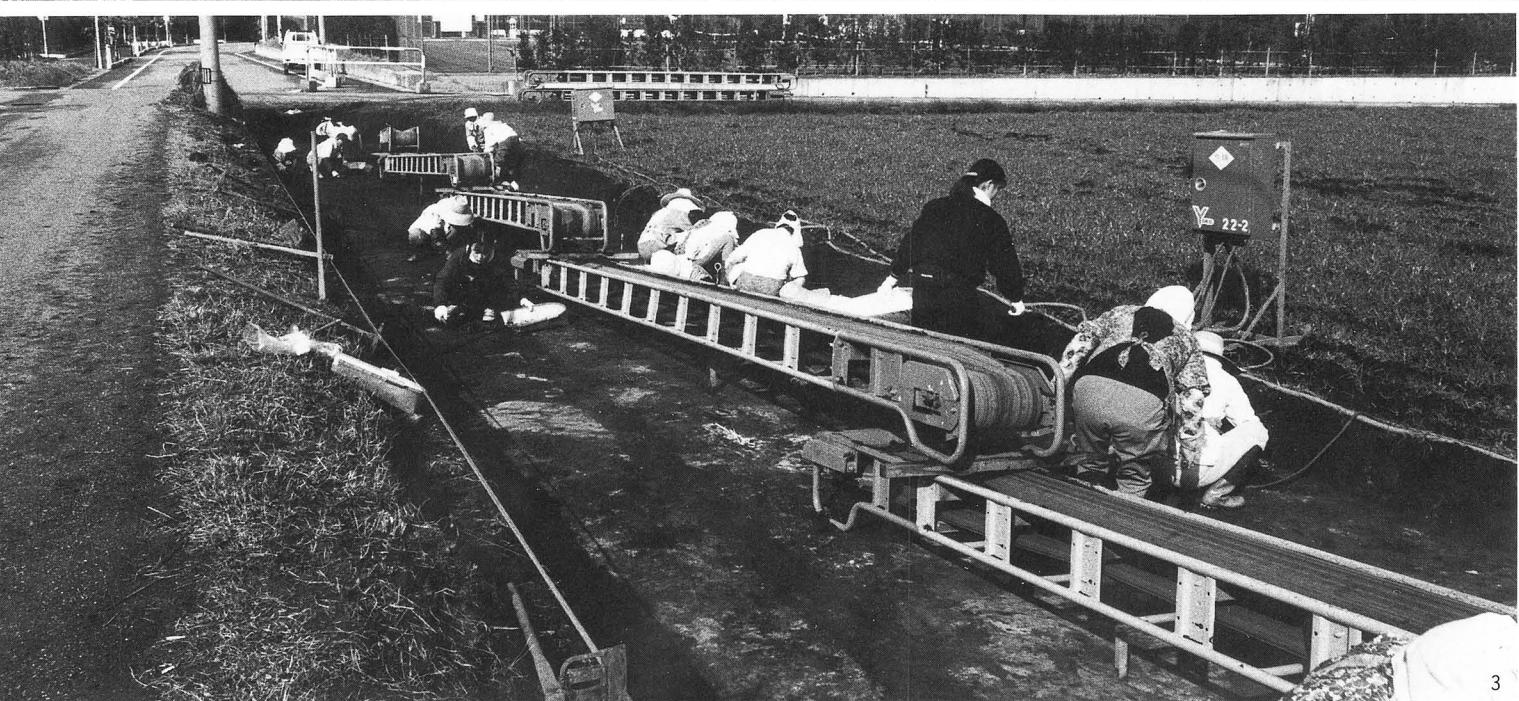


3

図版11 1. 土構検出状況, 2. 柱穴検出状況, 3. 1号住居跡



図版12 1. 2号住居, 2. 3号住居跡, 3. 石棒出土状況, 4. 石棒及び埋没ピット



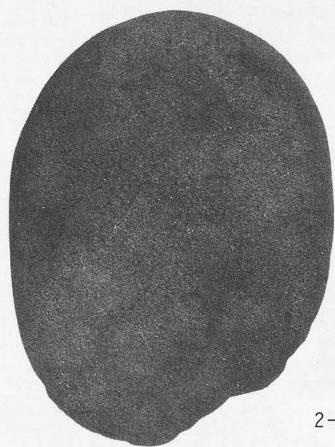
図版13 1. 2号住居跡 砥石, 出土状況, 2. 2号住居炉趾, 3. 作業風景, 4. 測量風景



2-1



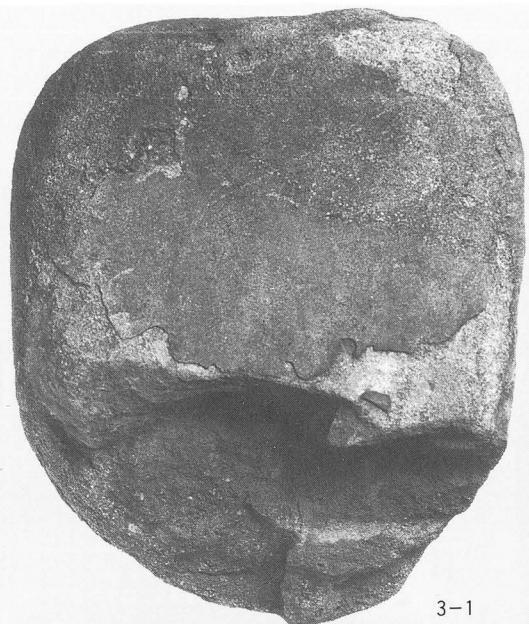
4-1



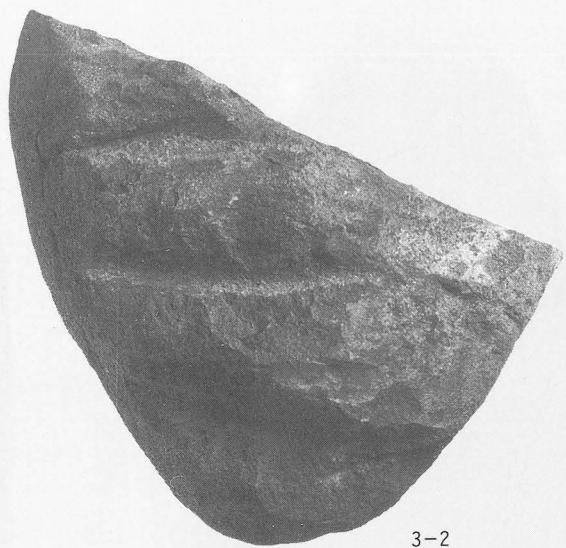
2-2

図版14 遺物写真

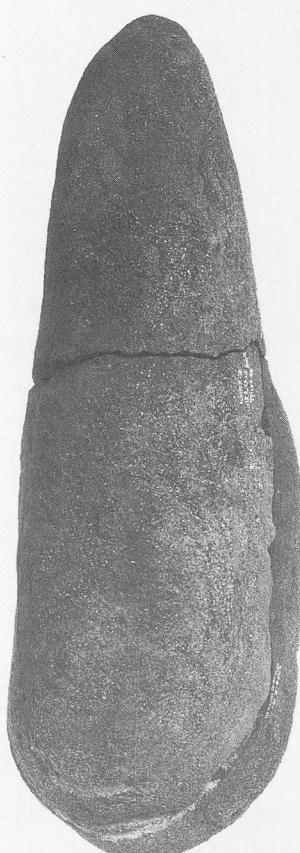
石棒, すり石(図版2参照) 繩紋土器(図版4参照)



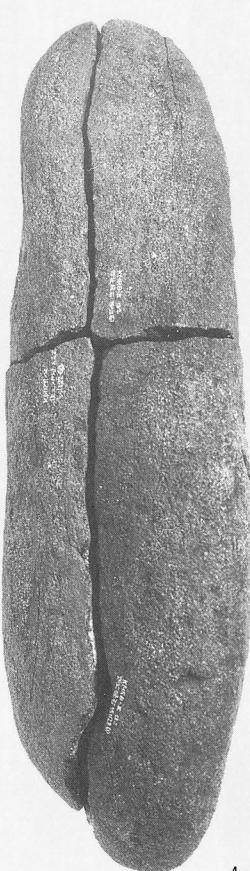
3-1



3-2



4-5



4-5



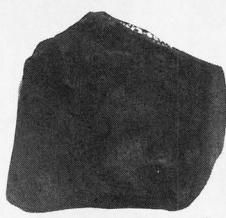
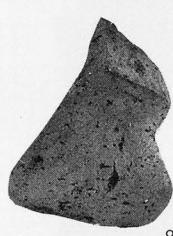
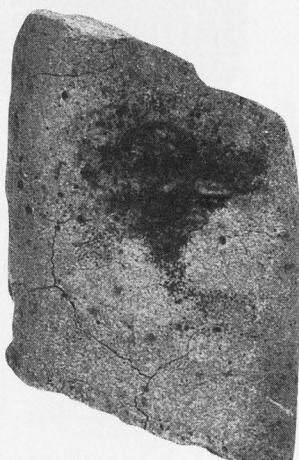
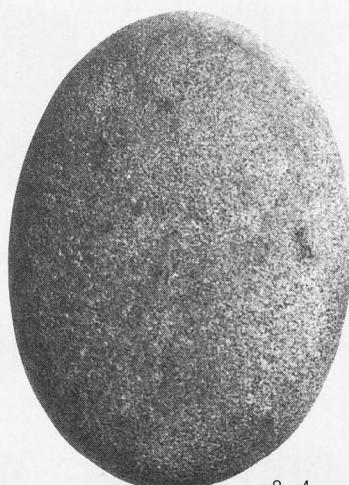
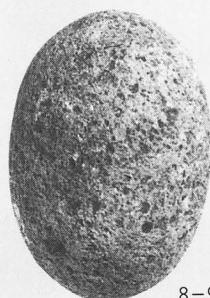
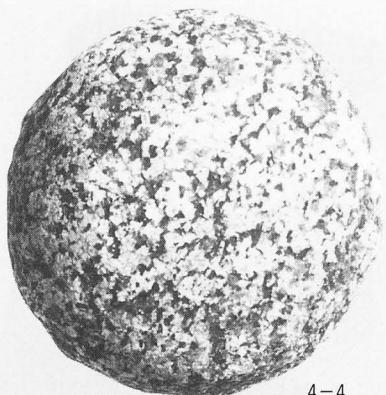
8-1



8-12

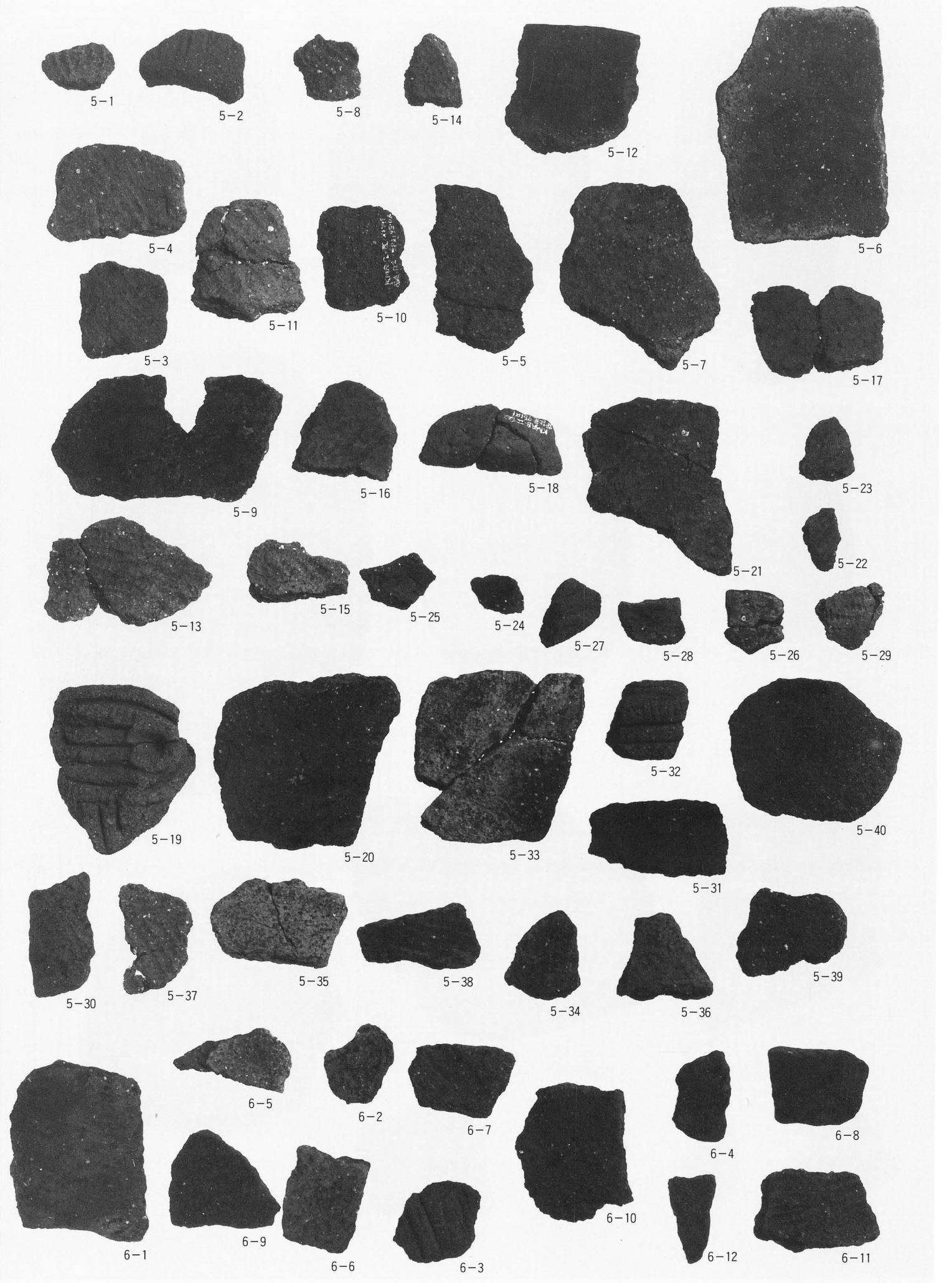
図版15 遺物写真

石器, 炉縁石出土状況 (図版 3, 4, 8 参照)



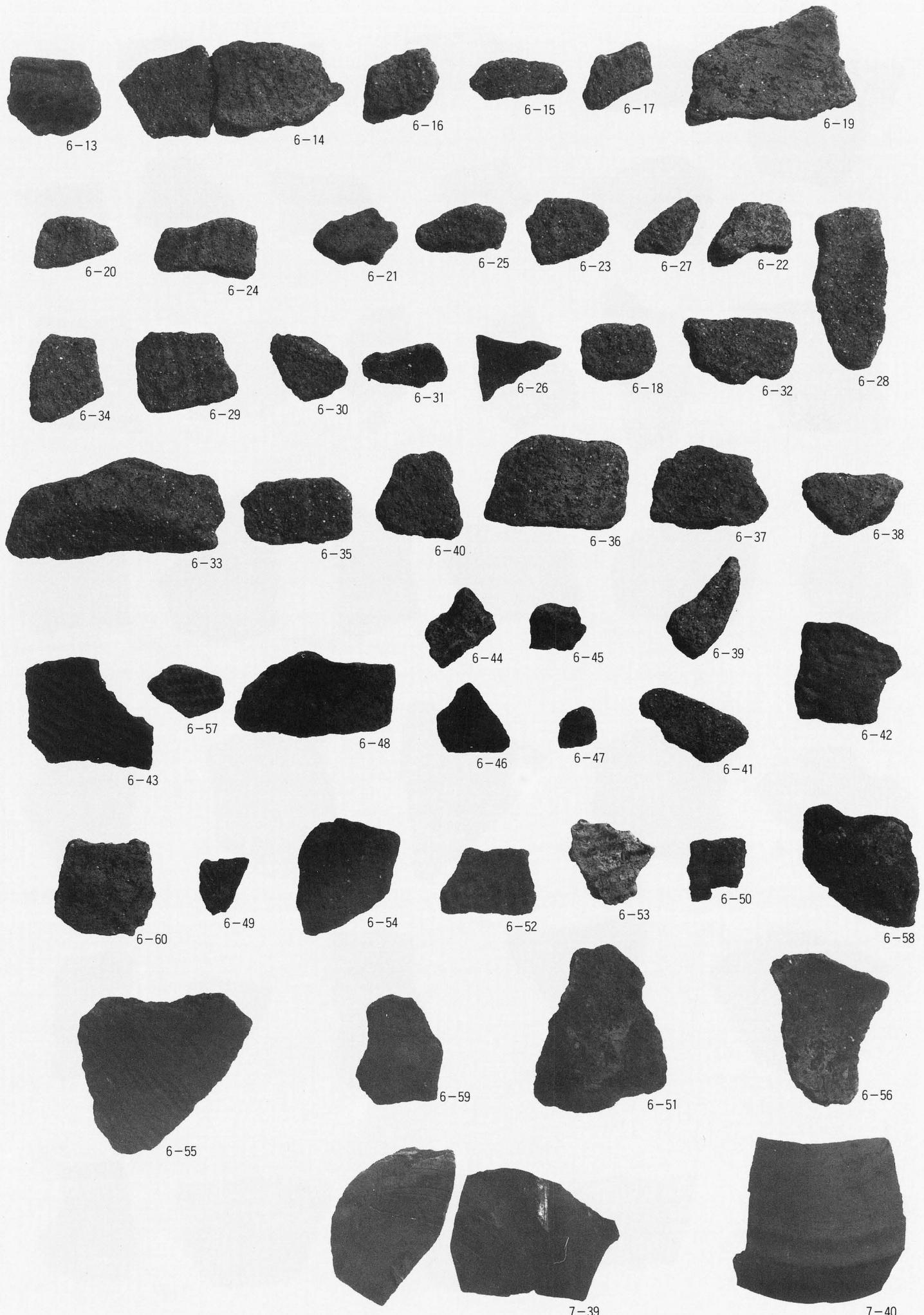
図版16 遺物写真

石器 (図版 4 , 8 参照)



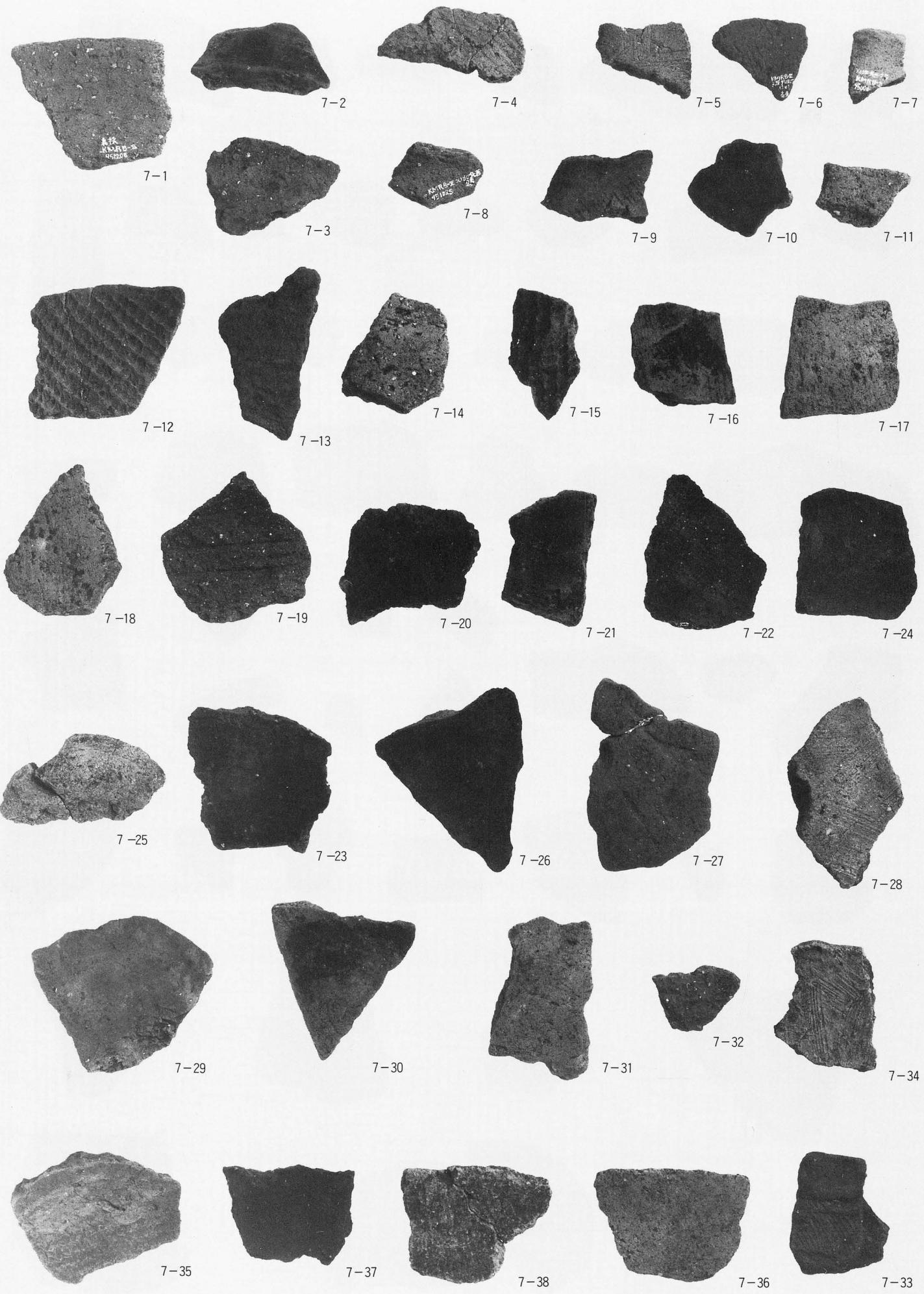
図版17 遺物写真

縄文土器 (図版5, 6参照)

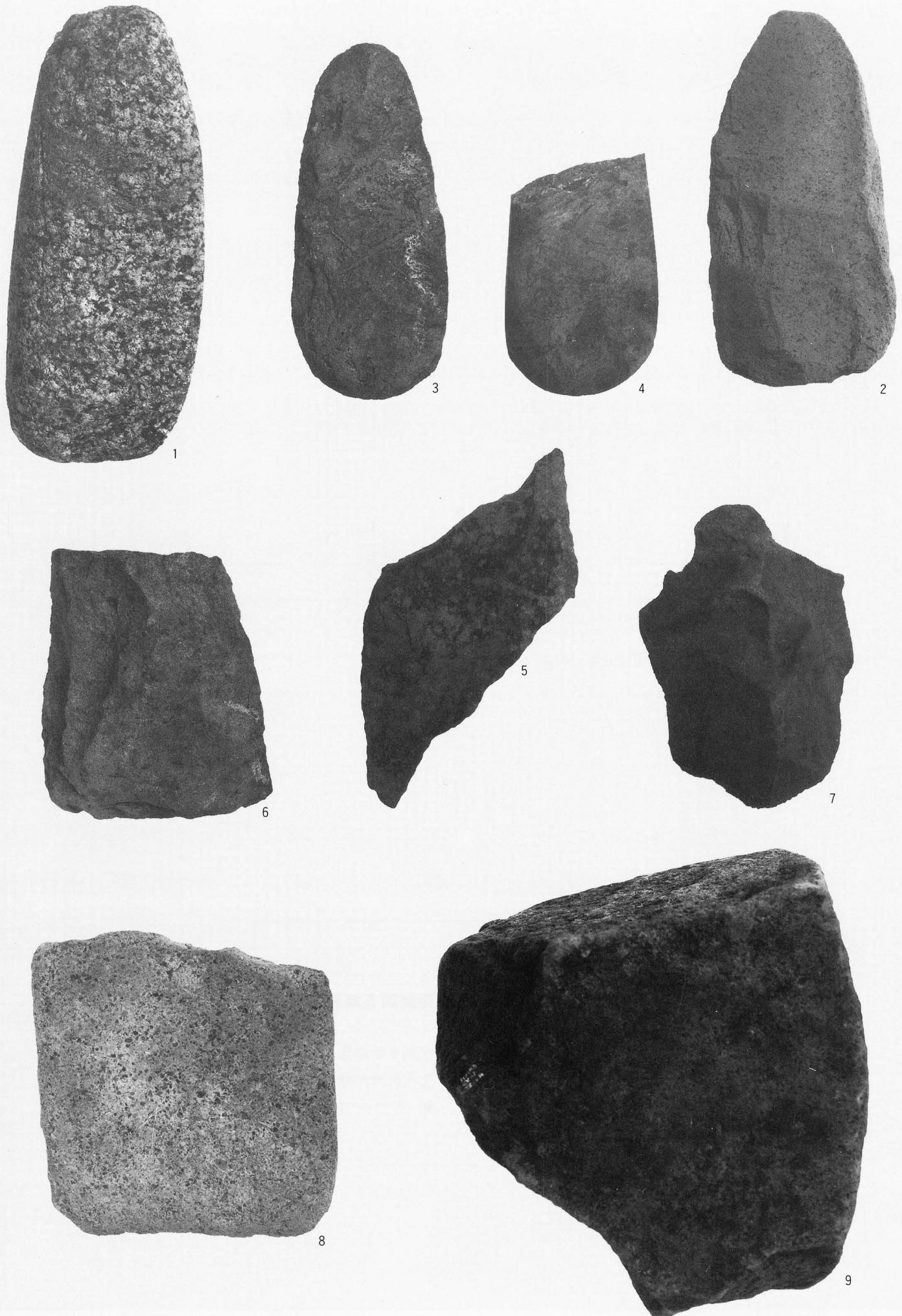


図版18 遺物写真

縄文土器 (図版 6 , 7 参照)



図版19 遺物写真
縄文土器 (図版7 参照)



図版20 遺物写真
石器 (図版9 参照)

富山県上市町
丸山B遺跡発掘調査概報

発行日 平成8年3月
編集・発行 上市町教育委員会
印刷者 (株)チュー工業

